

所用 銚子測候所編

千葉県氣象災害史

千葉県氣象災害連絡協議会

題字は 千葉県気象災害
連絡協議会長 友納武人

序

とかく天災は宿命的なものであり、自然の側에만原因があるように考えられる場合が多いが、むしろ、人間の側における自然に対する心構えの不充分に原因する場合が多い。

本県は太平洋に面した海洋性気候のため、比較的他県に比して気候災害はその地域と種類と時期が明瞭で、常習的であるといはれている。それ故、その罪が人間の側にありとされても止むを得ない。そこで、われわれは本県の自然界の性質をよく知り、災害の歴史、種類、性質を究め、人間の側から災害を最小限度に食い止め、禍を転じて福となす努力を怠ってはならない。

この意味において、本書は銚子測候所が多年にわたって県下の気象災害資料を史実より蒐集して、貴重なる時間を割き編集されたものであって、実に非常なる熱意の集積であり、価値あるものである。

本県にはこのような文献は殆ど見あたらず、地方行政の局にある者にとっては貴重なる資料となるのみならず、教職に在る者、郷土研究に志す者に好箇の参考書となるものと信ずる。

こゝに広く推奨する次第である。

昭和 31 年 7 月 1 日

千葉県知事 柴 田 等

発刊に際して

我国は世界でも有数の災害国である。風災、水災、震災或は凶冷、旱害の様な農業災害から我国特有の建築材料による火災までも挙げられる。この様な災害は古来如何に国民生活に影響をもたらしたか。如何に多くの人々を苦しめたかは今更言を俟たない。

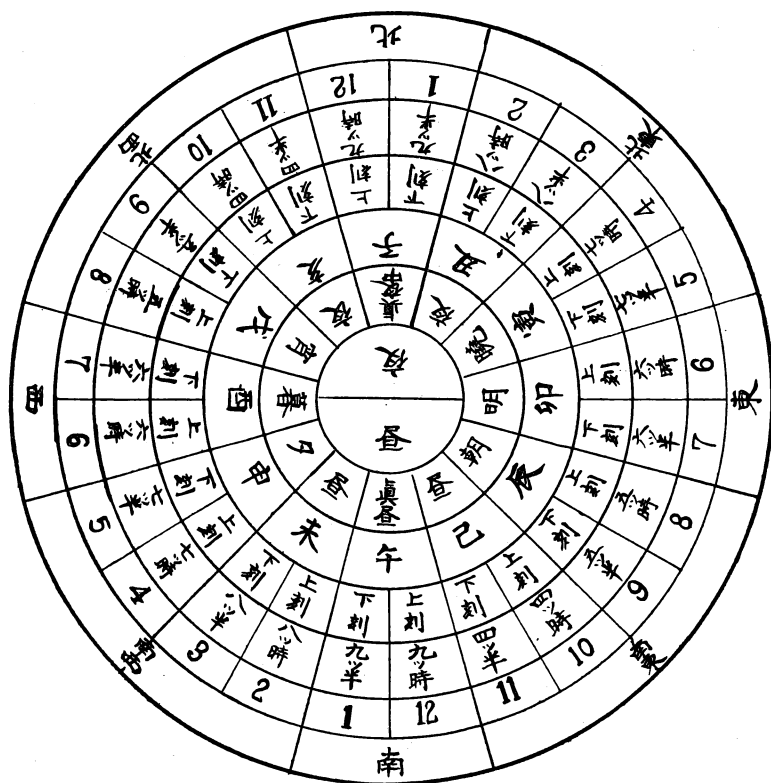
当千葉県に於ては本邦西部地方の如く殆んど毎年といっても良い程の大被害を起す災害常習地帯に比べれば、比較的平穩とも考えられるが、それでも有史以来の数を決して少くない。今、古人の遺した資料より本県に於ける災害記事を集録したが自然に順応して天恵に生き、災害を未然に防いで福利を増進するため何等かの参考ともなれば幸いである。何分色々の関係で資料の蒐集は意に任せず、又あらゆる文献に亘り渉獵する暇がないため甚だ杜撰なものとなったが敢えて公表して諸彦の御叱正を待つて補遺いたしたいと思う。

本書の編集には主として当所茨城、川崎両技官が当たられた。ここに両氏の並々ならぬ努力に対して心より謝意を表したい。

又本書刊行は千葉県知事柴田等殿始め関係御当局の深い御理解の賜であって衷心御礼申上げる次第である。

銚子測候所長 山 中 丘

新旧時刻方位对照图



出典書卷

表年史土郷市子銚

誌郡上海

誌郡武山

誌郡生長

誌郡隅夷

誌郡房安

誌郡津君

誌郡原市

誌郡葉千

誌郡飾葛

誌郡旛印

誌郡取香

誌郷土更津木

誌町原佐

庫文總房

表年化理

表年災害象氣日本

料史象氣日本

甲料史地震日本

覽要象氣

誌日蕃中田

法測觀震地

料資風台本日

誌縣葉千

景行天皇四十年

西暦110年

(暴風雨)

十月欲往上総望海高言曰是小海耳可立跳渡乃至干海中暴風忽起王船漂蕩而不可渡時有從王之妾曰弟橘媛穗積氏忽山宿禰之女也啓王曰今風起浪必王船欲沒是必海神心也願以妾之身贖王之命而入海言訖乃披瀾入之暴風即止船得著岸故時人號其海曰馳水也

(日本書記)

自其入幸渡走水海之時其渡神興浪船不得進渡爾其后名弟橘比賣命白之妾易御子而入海中御子者所遣子政遂應覆奏將入海時以菅疊八重皮疊八重絶疊八重敷子波止而下坐其上於是其暴浪自伏御船得進爾其后歌曰佐泥佐斯佐賀牟能袁怒邇毛由流肥能本那邇邇多知弓比斗斯岐美波母故七日之後其后櫛依干海邊乃取櫛乃取其櫛作御陵而治置也

(古事記)

それより相州へ越上総へ渡給ひけるに伏戸の渡にて波荒て船己に覆むとせしを掘取申しけるは船中の美人を龍神の見たとおほへ候と申しければ数百人の軍士を失はむよりはとて最愛の橘姫と申す夫人を一人流し給へり誠に忝なくさて船荒ることなく総州へ渡り云々

(神明鏡)

文武天皇二年

西暦698年10月16日

(大風)

九月七日下午総國大風壞百姓盧舍

(続日本紀)

大寶二年

西暦702年9月1日

(大風)

八月五日下午総國に大風あり

(千葉縣誌、海上郡誌)

神 龜 四 年 西曆 727 年 11 月 19 日

(大 風)

十月二日 安房國言大風拔_二木發_一屋損_二破秋稼_一又上総國云又然則同日房総二
國有_二大風雨_一可_レ知也 (續 日 本 紀)

天 平 十 三 年 西曆 741 年 10 月 18 日

(大 風)

九月房総の地方大風あり、人畜の死傷多し (海 上 郡 誌)

天 平 十 五 年 西曆 743 年 8 月 3 日

(大 風 雨)

八月九日上総國言七月大風雨數旬日雜木長三四丈以下二三尺以上一万五千許
株漂_二着部内海_一濱也 (續 日 本 紀)

天 平 勝 寶 元 年 西曆 749 年 2 月 26 日

(旱 魃)

二月五日上総下総國旱し蝗ありて共に飢饉なりしかば之を賑恤也り
(日本氣象史料)

天 平 寶 字 六 年 西曆 762 年

(大 旱)

下総國大に旱魃す (日本氣象史料)

天 平 神 護 元 年 西曆 765 年 4 月 1 日

(大 旱)

三月四日下総等の五國旱せしかば詔して今年の調庸十分の七八
(續 日 本 紀)

神護景雲三年 西暦 769 年

(大 旱)

下総國飢饉ありと

(房 總 叢 書)

天 応 元 年 西暦 781 年

(大 旱)

下総國飢えしを以て之を賑恤せり

(千 葉 縣 誌)

延 暦 四 年 西暦 785 年 9 月 8 日～
8 月 10 日～

(大 風)

七、八月下総國大風あり五穀を損傷し百姓飢饉するを以て使を遣して之を賑恤す

(日本氣象史料)

延 暦 八 年 西暦 789 年

(大 旱)

安房國飢ゆ

(續 日 本 紀)

延 暦 十 七 年 西暦 798 年

(大 旱)

下総國飢ゆ

(海 上 郡 誌)

延 暦 二 十 一 年 西暦 802 年 10 月 5 日～

(大 風)

九月上総等三十一國の田を損せられ百姓の租税調庸を免す

(千 葉 縣 誌)

弘 仁 九 年 西曆 818 年 8 月 10 日～

(地 震)

七月相模武藏下総常陸、上野下野等國地震山崩あり谷数里埋り百姓壓死する
者知れず

(大日本地震史料)

等 級 4

震源地 相模灣か

承 和 二 年 西曆 835 年 4 月 6 日～

(大 旱)

三月下総飢を告ぐ

(千葉縣誌、海上郡誌)

承 和 五 年 西曆 838 年 ^{9 月 27 日}7 月 29 日～

(降 灰)

七月より九月に至るまで上総等十六國灰の降ること累日止まず怪異に似たれ
ども損害あることなし今茲畿内諸道但に豊稔にして五穀の價賤し老農此の物
を米華と名づけたりと云ふ

(千 葉 縣 誌)

承 和 十 年 西曆 843 年 7 月 29 日

(大 旱)

六月二十五日上総及十八國飢加賑恤

(續 日 本 紀)

齊 衡 三 年 西曆 856 年 9 月 10 日

(降 灰)

八月八日安房國言天黒雨灰委地三四寸許分

(文 德 實 錄)

貞觀二年 西曆860年8月24日～

(大 旱)

八月下総國飢饉

(海上郡誌)

貞觀八年 西曆866年

(大 旱)

下総國飢ゆ

(海上郡誌)

元慶二年 西曆878年11月1日

(地 震)

九月二十九日相模武藏兩國地大に震ひ公私の屋舎破倒して一も全きものなし
是日關東諸國皆震ふ

(大日本地震史料)

等級 2

震源地 相模中部

仁和二年 西曆886年7月3日

(雷電地震)

五月二十四日夕有^二黒雲^一自南海群起其中現^二電光^一雷鳴地震通^レ夜不止二十六
日晡雷電風雨已時天色晴朗砂土粉土遍滿^二地上山野田園^一無^レ所不^レ降或所厚
二三寸或處僅蔽^レ地稼苗草木皆悉凋枯馬牛食^二黏粉草^一死斃甚多

(大日本地震史料)

仁和三年 西曆887年8月26日

(地 震)

七月三十日安房國地震

(扶桑略記)

等級 4

震源地 南海道東海道沖

天 延 三 年 西曆 975 年 10 月 1 日

(兩 月 並 見)

八月二十四日上総國申夜月及申方之間滿月始出東方 (日 本 紀)

上総國言兩月見

(大 日 本 史)

建 仁 元 年 西曆 1201 年 9 月 9 日

(大 風 雨)

八月十一日下総國大風雨海邊潮牽人屋千餘人漂没 (吾 妻 鏡)

建 永 元 年 西曆 1206 年 9 月 15 日

(大 風 雨)

八月十一日下総國海邊潮波漂死人不知數此年五穀不登 (日本氣象史料)

寬 喜 二 年 西曆 1230 年 10 月 15 日

(洪 水)

九月八日關東洪水有りて人多死す (日本氣象史料)

延 元 三 年 西曆 1338 年 10 月 24 日

(大 風)

九月十一日北畠親房東國を經營せんとし子顯信結城宗広等と、義良親王を奉
じ伊勢大湊を發す偶々上総海岸に於て颶風に遇い船四散し六艘は安房に漂着
す義良親王は顯信と伊勢に着き給ひ親房は常陸に漂着す (東 鏡)

興 國 四 年 西曆 1343 年 6 月 6 日

(地 震)

五月六日關東の地大に震ふ (君 津 郡 誌)

正 平 十 一 年 西曆 1357 年

(大 旱)

天下大に飢ゆ

(君 津 郡 誌)

建 徳 元 年 西曆 1370 年 10 月 $\frac{9}{10}$ 日

(大 風)

九月十九日二十日兩日關東大風田畠を損傷す

(日本氣象史料)

正 長 元 年 西曆 1428 年

(大 旱)

諸國荒飢餓死者数を知らず土賊蜂起す

(君 津 郡 誌)

永 享 四 年 西曆 1432 年 4 月 21 日

(地 震)

三月十二日夜大地震あり

(君 津 郡 誌、大日本地震史料)

永 享 五 年 西曆 1433 年 11 月 7 日

(地 震)

九月十六日下総上総國の地大いに震ふ

(鎌 倉 大 日 記)

九月十六日相模陸奥甲斐諸國地大に震ひ鎌倉、会津、被害夥し

(看 聞 御 記)

九月十六日日本國大地震云々

(塔寺八幡宮略記長帳)

等 級 1

二元地震か

永 享 六 年 西曆 1434 年 3 月 6 日

(地 震)

正月十六日地大に震ふ

(君 津 郡 誌)

寶 徳 元 年 西曆 1449 年 5 月 13 日

(地 震)

四月十二日大地震あり山武郡増穂村方正寺は地方に稀なる大寺院なりしが佛
閣僧坊悉く埋没す

(山 武 郡 誌)

享 徳 三 年 西曆 1454 年

(旱 魃)

天下旱魃にて飢饉人多く餓死す

(君 津 郡 誌)

明 應 元 年 西曆 1492 年 7 月 19 日

(地 震)

六月十六日地大に震す

(君 津 郡 誌)

明 應 四 年 西曆 1495 年 9 月 3 日

(地 震)

八月十五日大地震あり津浪起る

(玄 蕃 先 代 集)

明 應 七 年 西曆 1498 年 9 月 20 日

(地 震)

八月二十五日伊勢遠江駿河甲斐相模伊豆諸國の地大に震ひ瀕海の國は海嘯の
災を被れり是日京都奈良及び陸奥國會津も強く震ひ餘動月を重ねたり

(大日本地震史料)

八月二十五日近畿關東諸國の地大に震ひ房総の地殊に甚だし。時に長狹郡の
沿岸大海嘯起り地盤陥落し人畜共に没し小湊誕生寺ために破潰す

(内 浦 繪 圖 面)

等 級 4

震源地 東海道沖

明 應 八 年 西曆 1499 年

(大 旱)

各國飢饉人多く死す

(君 津 郡 誌)

文 龜 元 年 西曆 1501 年

(旱 魃)

大旱魃にて飢饉餓死者多し

(君 津 郡 誌)

文 龜 元 年 西曆 1501 年 4 月 28 日～

(降 霰)

四月大霰降る大さ芋の如しと言ふ

(海 上 郡 誌)

永 正 九 年 西曆 1512 年 3 月 18 日～

(大 風)

三月大風にて關東大餓

(日本氣象史料)

永 正 十 一 年 西曆 1514 年

(旱 魃)

大 飢

(君 津 郡 誌)

永 正 十 四 年 西曆 1517 年 10 月 4 日

(地 震)

九月九日夜半大に震ふ

(君 津 郡 誌)

(大日本地震史料には京都強震とあり)

永 正 十 六 年 西曆 1516 年 9 月 24 日

(大 風 雨)

九月朔日大風雨大木を吹き倒し、洪水ありて人多く死す (君 津 郡 誌)

天 文 十 八 年 西曆 1549 年 2 月 28 日

(大 風)

正月二十一日大風あり

(玄 蕃 先 代 集)

天 文 十 八 年 西曆 1549 年

(洪 水)

十二月(霜月)十四日大水にて死者多く出る

(玄 蕃 先 代 集)

天 文 十 九 年 西曆 1550 年 3 月 28 日

(降 砂)

三月砂降る晝暗きこと七日なりと云ふ

(海 上 郡 誌)

弘 治 元 年 西曆 1555 年 4 月 2 日～

(大 風)

三月下総國大風あり

(海 上 郡 誌)

弘治元年

西暦 1555 年 5 月 1 日

(大雨)

四月大雨降る

(海上郡誌)

天正十八年

西暦 1590 年 3 月 31 日

(地震)

二月十六日の夜諸國一同に大地震しける中に安房上総の兩國殊更に夥しく山崩れて海を埋め見るが内に岳をなす處もあり社頭佛閣寺院坊寮士農工商の家々轉倒せざるは稀なりけり。曉方に成て海上の潮俄に退き三十餘町干潟となる。波打際切崖石のはさまざまに辛螺米螺蛸蛇磯菜充滿し足の陷所もなかりければ初の程こそ自他仰天して其のあたりへ寄り附ざりしが二日一夜の干潟なれば里の子供無告の者所を争ひ走り行て魚を捕え貝を拾ふ事幾千萬数を知らず。然して十八日子刻許杳なる沖の方鳴動すさまじく聞えて黒雲の渦く如く見へたりし程に濱邊の者とも妻子を引連逸足を出して山上へ逃登りけるに暫く後高潮打寄て洪波漲り來り數十丈の小山の半腹まで押浸して漁家民屋ととごとく浪に引れ人馬の溺死其數を量り難し、堤切れ橋断へて陸地を船にて往返をなす。惣て安房上総下総の浦々四十五ヶ所に高波押騰たり此故に鱸の谷鯛の谷などとして其時大魚の打入られ谷々今の世までも遺れりとぞ

(關八州古戦録)

慶長元年

西暦 1596 年 7 月 6 日～
2 月 9 日～

(長雨)

正月より六月迄雨降り

(玄蕃先代集)

慶長元年

西暦 1596 年 11 月 25 日

(洪水)

六月二十日大水に依り多くの死者を出す

(玄蕃先代集)

慶長四年 西暦 1599 年 7 月 22 日～9 月 19 日

(大 風)

六、七月下總上總の三國大風吹夏秋凶餓死者あり。(當代記)(日本氣象史料)

慶長七年 西暦 1602 年 10 月 13 日

(風雨洪水)

八月二十八日風雨關東は夥しく所々水入る大凶年なり。(當代記)

慶長九年 西暦 1604 年 5 月 21 日

(大風雨洪水)

四月二十三日關東大風雨洪水。(當代記)

慶長九年 西暦 1605 年 2 月 3 日

(地震)

十二月十六日辛酉薩摩、大隅、土佐、遠江、伊勢、紀伊、伊豆、上総、八丈島の諸國嶼地大に震ひ海嘯を颺げ人家を漂倒すること算なし。

(大日本地震史料)

(千葉縣に關しては房総治亂記に詳細にあり被害を受けたる地域は千葉縣下全般に及べり。房総治亂記武江年表には慶長六年十二月十六日とあるは誤りであると大日本地震史料にあり。)

房総治亂記抄

慶長六年十二月十六日大地震山崩海埋て岳となる此時安房上総下総海上俄に潮引て三十余町干潟となり二日一夜也同十七日子の剋沖の方夥く鳴て潮大山の如くに卷上て浪村山の七分に打かゝる。早く逃る者遁れ遅く逃る者は死たり。先潮災に逢しは邊原、新宮濱、澤倉濱、小湊、内浦、尼津、濱萩、磯

村、名太尼、禰太夫崎、江見、和田、白古、邊楯、骨戸、横桶、御宿、岩
和田、岩舟、矢指戸、小濱、澁田、日安里、和泉、東浪見、一ノ宮、名萩、
一松、牛込、反金阿、負濱、方貝、不動、堂都て四十五ヶ所也。

房総軍記抄

慶長六年冬十二月十六日暴忽に大地震動し雷々として深山萬壑鳴動すること
夥し、當舍佛閣涌倒され磐石崩れて、海を埋立山となり安房上総の海斯須に
潮三十余丁干潟して、平沙となること二日一夜。諸人驚騒て四方!登て眺けば
忽涌倒され首逆になり足空になりてさながら天地轉覆すかと眩暈す。是は稀
代の珍事かなと、肝を冷し魂を消して號々然なる處に同十七日子の刻方々夥
しく鳴動し、其響大山の崩るよりなほ凄しく四維上下震動す。ほどこそあれ
逆浪漲溢れて漲溢れて潮海卷上り國中漾滿して民屋を押流し大木を壓倒し堤
壊れ岸砕け、益溢れて淼々滿滿として天に激り月出て水中にあり山林草木海
府にあるやと怪まれ村山の七合に湍々たり。農民は家財雜具を壓流し早く逃
る者は助り遅く逃るは溺死となる。

[illegible]

慶長十四年

西暦 1609 年 4 月 5 日

(雷 電)

三月一日下総國笠井氷降て家十七八間破損雷夥啼る。關宿にて雷杉の木に震す。

(徳川實記)

慶長十四年

西暦 1609 年 10 月 3 日

(大 風)

九月六日房総地方大風起り家屋を倒し樹木を折り船舶を覆す。

(房総軍記)

上総大多喜領、曲田、矢指戸との間田尻と云へる處に唐船漂着す。

(房総軍記)

慶長十九年

西暦 1614 年 11 月 26 日

(地 震)

十月二十五日大海嘯あり

銚子飯沼觀音境内後門に潮水浸入す。

(玄蕃先代集)

此の地震大日本地震史料にあり。

元和三年

西暦 1618 年 1 月 8 日

(大風高潮)

十二月十三日津浪飯沼に上ると傳ふ。

(銚子市郷土史年表)

元 和 七 年 西曆 1621 年 4 月 28 日

(大 風 雨 雷)

三月七日大風雨雷なる事甚し豆腐の海上大に荒て渡海の船覆没し溺死する者
数百人に及ぶ。 (徳 川 實 紀)

三月七日大風雨雷大に鳴晚方晴又大風吹き終夜不止房州豆州よりの渡海之船
悉く破滅数百人死。 (柳 營 日 次 記)

寛 永 元 年 西曆 1624 年 4 月 18 日～

(洪 水)

三月利根川洪水。 (香 取 郡 誌)

寛 永 四 年 西曆 1627 年 9 月 14 日

(地 震)

八月五日地震海嘯あり。 (安 房 郡 誌)

寛 永 十 二 年 西曆 1635 年 7 月 29 日

(雷)

大雷須賀山村諏訪神社に震す。 (香 取 郡 誌)

寛 永 十 六 年 西曆 1639 年 3 月 17 日

(大 風 雨)

二月十三日大風雨あり。

飯沼堂の下綱中八兵衛屋敷下崖迄波打上げ前田廟所迄川底づたいに飯貝根岡
へ上る。 (海 上 郡 誌)

寛永十八年 西暦 1641 年 9 月 5 日～

(雪)

八月雪降る。此の年大飢饉。 (安房郡誌)

寛永十九年 西暦 1642 年

(早 魃)

上総國東金地方穀登らず。 (千葉縣誌)

寛永十九年 西暦 1642 年 8 月 26 日～

(地 震)

八月安房國地震及び海嘯あり。 (千葉縣誌)

慶安三年 西暦 1650 年 6 月 29 日

(降 雹)

六月一日下総國州所雹降る重さ一斤餘なり今夏雖土用甚冷可著綿衣。

山鹿素行先生日記

(日本氣象史料)

慶安四年 西暦 1651 年 11 月 25 日

(大 風 雨)

十月十三日行徳の邊民家數千軒傾覆せりとぞ。 (徳川實紀)

承應三年 西暦 1654 年 12 月 9 日～

(大 風)

十一月大風大浪によつて飯貝根^{イカイネ}の人家六十軒流さる。 (吉田畧傳)

明 曆 元 年 西曆 1655 年 5 月 6 日～

(地 震)

四月東上総の地大に震ふ。

(千 葉 縣 誌)

明 曆 二 年 西曆 1656 年 7 月 22 日～

(降 雹)

六月雹降る目方八十五匁ありと云ふ。

(海 上 郡 誌)

明 曆 二 年 西曆 1656 年 10 月 9 日

(大 風)

八月二十二日風浪の災ありて百姓家十五軒^{ナイツ}旅宿(漁人の宿舍)三十四軒流さ
る。

(銚子郷土史年表) (日本氣象史料より訂正)

明 曆 三 年 西曆 1657 年 11 月 6 日～

(地 震)

十月海嘯あり人馬斃するものあり。

(銚子郷土史年表)

萬 治 三 年 西曆 1660 年 6 月 12 日

(洪 水)

五月五日利根川洪水、下櫻井、宮原等の耕地を浸し用水路等を破壊す。

(日本氣象史料)

寛 文 二 年 西曆 1662 年 10 月 30 日

(地 震)

六月十九日銚子に海嘯あり。

(銚子郷土史年表)

寛文七年 西暦1667年

(洪水)

利根川出水あり、再び下櫻井、宮原等の沿岸耕地を浸す。(香取郡誌)

寛文十年 西暦1670年7月19日

(風雨洪水)

六月三日下総國關宿風雨にて洪水。

(徳川實紀)

寛文十年 西暦1670年12月21日

(地震)

十一月五日房総の地海嘯の惨害を蒙る。

(海上郡誌)

等級 1

震源地 相模

延寶二年 西暦1674年7月15日

(雷)

六月十二日大雷須賀山村諏訪神社に震す。

(香取郡誌)

延寶二年 西暦1674年9月5日

(大風雨)

八月六日日本郡地方大風雨須賀山村諏訪神社境内松樹折損するもの五百餘株。

(香取郡誌)

延寶四年 西暦1676年2月13日～5月12日

(霖雨)

正月より三月に至るの間霖雨。

(香取郡誌)

延寶五年

西曆 1677 年 11 月 4 日

(地震)

上総國沿岸に海嘯あり。

(君津郡誌)

十月九日夜四ツ時銚子に海嘯あり

笠上飯沼に人畜の死傷を出す。千人塚の側に大池を現出す、又高神村大池に
洪漚打揚げ樹木の倒るるもの一萬餘、外川、長崎の漁船民家大被害を蒙り人
畜の死傷多し。

(木口会史、玄蕃先代集)

等級 3

震源地 小名濱沖

貞享二年

西曆 1685 年

(大旱)

旱す。

(香取郡誌)

元祿四年

西曆 1691 年 8 月 15 日

(大風雨)

七月二十二日北風暴烈變じて東南風となり潮水陸上に達す。鰹漁船顛覆して
漁夫死する者四百四人ありたりと言ふ。

田畑荒寥竹木枯凋して人民飢饉す。

(海上郡誌)

元祿八年

西曆 1695 年

(大旱)

大飢饉あり。

(安房郡誌)

元 祿 十 四 年 西 曆 1701 年 4 月 18 日

(降 雪 霰)

三月十一日干潟地方大に雪霰あり禾穀を害す。

(香 取 郡 誌)

元 祿 十 四 年 西 曆 1701 年 8 月 24 日

(大 風)

七月二十一日北風強く変じて南東風と爲り海水暴漲し干潟地方亦損害あり。

(香 取 郡 誌)

元 祿 十 五 年 西 曆 1702 年

(大 風)

月日不詳海風大に起り田圃を害す。

(香 取 郡 誌)

(龍 卷 か)

塩雨が降つたとの記録あり。

(銚子郷土史年表)

元 祿 十 六 年 西 曆 1703 年 12 月 31 日

(地 震)

十一月二十三日甲子丑刻武蔵、相模、安房、上総諸國地大に震ひ就中江戸、小田原被害最も甚し、續て海嘯暴溢し相模の小田原、鎌倉の沿海安房の長狹朝夷兩郡、上総の夷隅郡等、其災を被れり、餘震年を越えて止まず。

(大日本地震史料)

等 級 4

震源地 房 州 沖

元 祿 年 録

元祿十六年十一月二十三日昨夜丑刻大地震御城中所々石垣御櫓御多門等崩破其外江戸中大小名之家作並町屋民家轉倒夥數也其上相州小田原城中城外人家潰失火燃出人多損亡安房上総潮漲海民悉漂流死亡者不可勝計慶安二己丑年武州大地震有之以後者今度初て也。

基 瀬 公 記

元祿十六年十一月二十二日甲子丑刻房州大地震にて九十九里の濱まで津波きたり、おびたゞしく死人有之。

甘 露 叢

相州、房州、上総、武州不殘地震す、武劬も北の方は弱き由大概を記す
房州小湊誕生寺大地震殊に大浪にて小湊村在家二百七十軒程、市川村在家三百軒程流る寺中六坊浪に取られ妙蓮寺は堂、客殿は相殘其外は皆不見す。

房州御領 御代官樋口久兵衛

長狹郡平塚村の内大山と申す不動山（御朱印地）地震にて不動堂の西口五六尺程ゆり割、杉の立木ゆり込候由、峯岡山と申す野馬場長さ三里餘峯つゞきの所峯の内所々口三四尺或は五六尺ずつゆり割の由、朝夷郡千倉と申す浦邊より平郡、安房郡浦方地震津波以後潮差引無之常々潮差引所より八九町或は半道一里ほども干潟になり当分潮さし申さず候、民屋破損人并牛馬の死亡有之由細に知れず。

上総國夷隅郡御宿鄉村々地震津浪にて民家潰或は流失尤津浪の所は家財、穀物舟綱ともに流失、村々田畑砂押し入り、川峽山崩等所々に有之候由、津浪は二十七年以前の浪より、二丈餘高しとなり。

潰家四百四十軒

死亡二十餘人

殞牛馬各一疋

京極對馬守領分房州長狹郡朝夷郡内二千石の内十一ヶ村地震并津浪にて

死亡四十二人（内二十八人浪にとらる）

死馬二十七疋

潰家六百八十七軒

高石四十石餘水荒

（大日本地震史料）

（誌上に見る元祿十六年十一月二十二日の地震による海嘯の跡）

元祿十六年癸未十一月二十日本州の地大に震す夜東海嘯洪濤陸に侵入し夷隅、長柄、山邊、武射、四郡沿海の村落其害を被り家畜を斃し家屋を奪去せられ溺死するもの幾千人なるを算ふ可からず。其死屍を集収し各所に埋葬す最も著しきもの六墳たり。

夷隅郡久保村の東方沙漠中に千人塚在り、當時溺死者を葬る其の數詳に傳はらずと雖も千人塚の名稱に因れる者ならん、今墳上に牌あり

長生郡一ツ松村本興寺境内供養塚在り、死屍三百八十四を合葬す本寺位牌の背後に維元祿十有六年癸未十月二十二日之夜於當國一松大地震尋揚大波鳴呼天乎是時民屋流失牛馬斃死亡人不知幾萬矣、今也記當寺有録死者千名簿勒回向於後世者也と記す。

幸治村に無縁塚在り死者三百六十餘を合葬す今墳上松樹蒼々たり。

牛込村の南方字古屋敷墓所中に津浪精靈と稱する一墳在り死者百三を合葬す。

山武郡四天木村の中央要行寺境内に津波溺死靈魂碑と書せし木塔在り死者二百四十五を合葬す。

山武郡松ヶ谷村字地藏堂に千人塚在り死者の數詳ならず蓋名稱に因れる者ならん、今墳上石地藏を置く。

其他自己の埋葬する者舉げて算ふ可からずと謂ふ。 （長 生 郡 誌）

元祿十六年十一月二十二日の大海嘯に際して死屍三百八十四人を拾集して此の地に合葬せり。同海嘯は實に夷隅、長生、山武の三郡に亘り、家屋を流し人畜を斃すこと其の數を知らず今各地に存する無縁塚或は千人塚と稱するものは、皆當時の溺死者を合葬せる舊址なりと云ふ。　（一　松　村　誌）

元祿十六年十一月二十二日の大海嘯に際し被害多し　（大　東　村　誌）

元祿十六年十一月二十二日關東諸國地震海嘯あり房総の沿岸殊に甚しく人家倒潰し人畜の死傷算なく又地形の変動を見る。安房小湊海岸の道路は没して海中に入れり。　（君　津　郡　誌）

元祿十六年十一月二十二日八ツ時津浪にて方々損し船付崩れ候につき、村中並に浦方の者共と普請なす。　（銚子木口会史）

元祿海嘯溺者墓

長生郡一松村大字一ツ松本興寺境内に在り供養塚と稱す。元祿十六年海嘯溺死者の屍三百八十四個を合葬せり。

白潟村大字幸治に無縁塚あり當時の死屍三百六十個を合葬す。

南白龜村大字牛込に津浪精靈と稱する塚あり當時の死屍百三個を埋葬す。其の他同村五井等にも同様の墳墓あり。　（千　葉　縣　誌）

元祿海嘯溺死者墳

御宿町大字久保の東方に在り、千人塚と稱す墳上石塔あり元祿十六年十一月二十二日夜上総に大地震あり。二十三日夜海嘯大に起り洪濤陸に上り夷隅、長生、山武三郡の沿岸其の災に罹らざる所なく溺死者無慮數萬に及べり乃ち

其の死屍を集めて各處に埋葬す此の墳は其の一なりと云ふ。

(千葉縣誌)

妙の浦

安房郡小湊に在り蓮華潭の南西巨巖海中に駢峙すること三町餘古來釣魚を嚴禁す。故に鯛魚多く棲息するを以て又鯛の浦の稱あり。往時此の邊皆陸地にて誕生寺の庭前なりしが元祿十六年地震海嘯の爲に没して海となる。

(千葉縣誌)

誕生水

安房郡小湊誕生寺内に在り、此の水もと誕生寺舊地にあり。傳へ云ふ日蓮誕生の時庭中に涌出せしを以て、用ひて産水となせり。明應中海嘯ありて寺海中に没す、因りて寺を妙ノ浦に移す。元祿中再び海嘯ありて更に今の地に移り、而して水毎に寺傍に出ず因りて誕生水の名を襲ぐと。蓋ふに屋を以てし石爛以て之を圍み其の外更に木柵を施せり。

(千葉縣誌)

松平陸奥守陣屋址

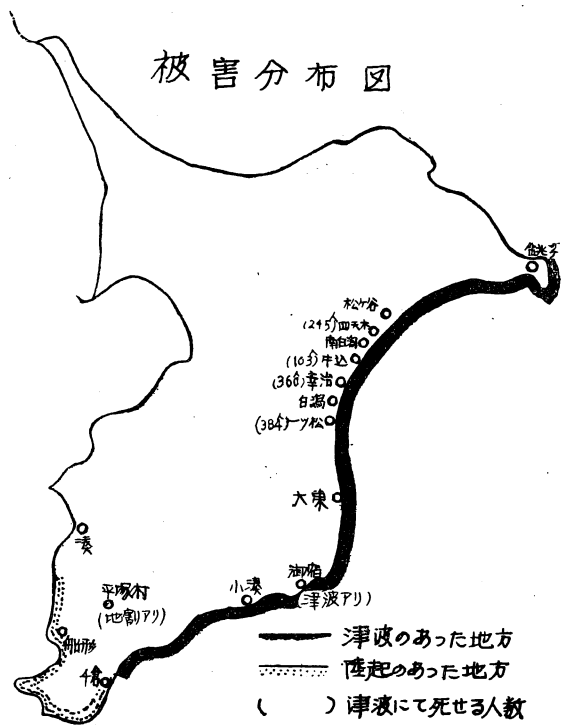
君津郡湊村大字内浦字新町に在り創設年月詳ならず。元祿十六年海嘯の爲め流失す。因りて本村栖原屋市太夫の所有地を買収し十七年再築せり。今村民仲村國松の所有宅地四畝二十三歩既ち是なり。

(千葉縣誌)

那古寺

館山市にあり、元祿十六年十一月二十二日大地震の時堂塔は勿論數多の寺寶悉く地中に埋没して烏有となる。

(安房古事志)



寶永元年

西暦 1704 年 3 月 29 日

(地震)

二月二十四日大地震あり。

地裂け水出ず年中稔らず。

(米相場考)

寶永元年

西暦 1704 年 8 月 3 日

(霖雨洪水)

七月三日下総國行徳水害あり溺死するものあり。

(徳川實紀)

寶 永 元 年 西曆 1704 年 11 月 27 日～1705 年 4 月 22 日

(不 雨)

十一月より翌年三月に至るの間雨降らず。 (香 取 郡 誌)

寶 永 二 年 西曆 1705 年 12 月 2 日

(火 事)

十月十七日寺町大火真言宗六ヶ寺木佐良津鎮主八幡宮並家舎成就寺本堂庫裡
方大鐘番神棲其他堂宇不殘焼失す。 (木更津郷土郷誌)

寶 永 四 年 西曆 1707 年 12 月 16 日

(噴 火)

十一月二十三日富士山噴火降灰多し。 (米 相 場 考)

十一月二十三日富士山噴火し寶永山生ず降灰の害多し。(大日本地震史料)

享 保 五 年 西曆 1720 年 5 月 29 日

(火 事)

四月二十四日明セツ半時より外川新浦邊の方五郎右衛門納屋より出火。巽風
にて家多く焼失、濱は七郎兵衛納屋、其上は市郎兵衛納屋、風なりに留り、
西の方上にて新納屋清兵衛残り、道より上、角次衛門納屋残り。二百數十軒
焼三十軒残る。 (木 口 会 史)

享 保 六 年 西曆 1721 年 9 月 9 日

(大風雨、洪水)

七月十八日イナサ大風雨にて畑作類悪し。 (海 上 郡 誌)

下総國關宿久世隱岐守殿領分閏七月十八日の夜丑の刻迄に一丈八尺水増申候、御城内二三丸、其外御關所、家中、町家ともに水入る。尤屋根の上迄水上る所あり。本丸は地形高き故、水入不申一面の大水故堤押切損亡人馬怪我人大分の事に数未知候二三十年以來無之洪水の由也。

下総國佐倉稻葉丹後守殿領分先頃より雨降續候、閏七月十七日洪水。

下総國香取郡の内井上筑後守殿領分閏七月十八日洪水損亡、水の高さ常の水に一丈餘増申候。
(月堂見聞集、日本氣象史料より)

享保八年 西曆 1723 年 9 月 9 日

(大風雨洪水)

八月十日久世隱岐守殿下総國關宿洪水五萬石計損毛人も四五百人溺死す。

(月堂見聞集、日本氣象史料より)

享保十二年 西曆 1727 年 10 月 26 日

(大風雨)

九月十二日大風雨あり、貝塚村山崩ありて死者あり。(香取郡誌)

享保十三年 西曆 1728 年 2 月 26 日

(火事)

正月十七日夜七ツ頃より明六ツ頃迄外川火事。(木口会誌)

享保十五年 西曆 1730 年 8 月 26 日

(大雷)

七月十三日大雷。(香取郡誌)

享保十五年 西暦1730年10月10日
(大風雨、洪水)
八月二十九日大洪水あり當地方一帯の町村に浸水す、川端の民家七戸押流さ
る。(葛飾區誌)

享保十七年 西暦1732年
(洪水)
干潟新田出水 (香取郡誌)

享保十七年 西暦1732年3月23日
(火事)
壬子二月二十七日俗稱吾妻のどんどん火事の折、堂宇寶物等悉く焼失す。
吾妻より寺町方面まで延焼したものと推定される。(木更津郷土誌)

享保十七年 西暦1732年12月6日
(山崩)
十月十九日晝八ツ頃夥しく地鳴して千騎ヶ嶺東の方大に崩る。頂上にて半分
程も崩る。(木口会誌)

寛保二年 西暦1742年9月6日
(大風雨、洪水)
八月八日關東洪水下総等の四國被害最も甚し。(米相場考)

八月八日下総國關宿の城大破す、死人多し。(窓のすさみ)
秋利根川洪水稼穡を害す。(香取郡誌)

八月八日大洪水あり、江戸及びその近郊の浸水十餘日に及ぶ、その災害甚しく幕府大に役を起し諸侯に課し堤防河川を修めしむ（葛飾區史）

延保三年 西曆 1746 年 7 月 22 日

（大風雨）

六月五日巽風雨畑作大いにいたむ。（木口会誌）

寶曆二年 西曆 1752 年

（洪水）

栗山川出水（香取郡誌）

寶曆七年 西曆 1757 年 5 月 18 日～
6 月 16 日

（霖雨洪水）

四月十八日より五月六日迄晝夜霖雨にて諸國大水秋の如し、關宿大水。

（東京市史稿）

寶曆七年 西曆 1757 年

（洪水）

秋利根川洪水。（香取郡誌）

寶曆十一年 西曆 1761 年 9 月 15 日

（大風雨）

八月十七日銚子に風雨海嘯あり。（海上郡誌）

寶曆十一年 西曆 1761 年 12 月 18 日

（大風雨）

十一月二十三日大風雨貝塚村人家頽壞するもの二十餘軒。（香取郡誌）

明 和 三 年 西曆 1766 年 3 月 8 日

(地 震)

一月二十八日銚子に海嘯あり

(海 上 郡 誌)

明 和 三 年

西曆 1766 年 7 月 7 日～
10 月 3 日

(長 雨 洪 水)

下総國(中略)ことし六月より八月にいたるまで雨ふりつゞければ水害かう
ぶりし村々(下略)

(徳 川 実 紀)

明 和 七 年

西曆 1770 年 6 月 20 日

(旱 魃)

五月二十七日降雨あり。後百餘日間旱し樹木枯損するもの多し。

(香 取 郡 誌)

明 和 八 年

西曆 1771 年 6 月 5 日～
8 月 10 日

(旱 魃)

四月二十三日より二箇月余降雨なし水田龜裂す。

(香 取 郡 誌)

安 永 元 年

西曆 1772 年 8 月 29 日
30 日

(大 風 雨)

八月朔日南東風烈しく同二日南風最も強く禾稼を損すること多し。

(香 取 郡 誌)

銚子に風雨海嘯あり。

(海 上 郡 誌)

安 永 三 年 西曆 1774 年 7 月 3 日

(大風雨、洪水)

六月二十三日關東洪水あり。

銚子に津波あり。

(米 相 場 考)

大風あり。

(君 津 郡 誌)

安 永 三 年 西曆 1775 年 1 月 2 日～

(酷 寒)

十二月寒氣殊に烈しく利根川筋結氷し銚子河口に至るまで舟楫を通ぜず。

(香 取 郡 誌)

安 永 四 年 西曆 1775 年 9 月 25 日～

(地 震)

九月安房、相模、伊豆、海嘯ありて、民家漂没し人多く溺死す。

(米 相 場 考)

安 永 六 年 西曆 1777 年 8 月 3 日～

(大雨洪水)

七月印旛郡洪水。

(續日本王代一覽)

七月印旛沼出水利根川に氾濫し本郡地方亦被害す。

(香 取 郡 誌)

安 永 八 年 西曆 1779 年 10 月 3 日

(大風雨洪水)

八月二十日より大雨連日二十四日、二十五日大風雨にて上總國洪水。

(續日本王代一覽)

飯田村山崩れ安國寺壊る。

(香 取 郡 誌)

安 永 九 年

西曆 1730 年 7 月 27 日

(大 雨 洪 水)

六月この月なかばより雨ふりつゞきて武蔵、上總、下總、上野、下野、常陸の國々に水あふれ漂溺の民屋あまた有しによりて關東郡代伊奈半左衛門忠尊に仰せて窮民を賑救せらるといふ。

(德 川 實 紀)

夏幾日ともなく大雨降利根川、荒川、戸田川をさきとして關東の大河の限り、水溢れ堤崩れ武蔵、下総一面の地卑の方は洪水せり。

(後 見 草)

安 永 九 年

西曆 1781 年 1 月 6 日

(赤 氣)

十二月十二日夜長凡九尺餘、幅五五寸許、地より離るゝこと五、六丈也、以上皆下より見計らひての寸尺也酉の半刻より戌の刻に至て消る。遠近ははかりがたし關宿城中より見渡せば戌亥の方より少し子の方へふりてあらはる。其の色眞の朱にして上下共にぼつとくまどりたるやうに見ゆ。是は赤氣と云ものにて古来より異國にても度々有事也と、また赤きは陰氣の壯なる所へ出るは全く陰氣のこもりたるものにて明日は大雨ならんと言しが少し曇りたる由也。又古河(關宿より三里)にても同様に見へしと云り。右段々上下よりうすくなりて消し關宿侯久世隱州臣池田正樹權左衛門記にあり。

(一 話 一 言 日本象氣史料)

天 明 二 年

西曆 1782 年 8 月 9 日
9 月 6 日

(降 雪)

七月下総國雪降る。

(續日本王代一覽)

天明三年 西暦 1783 年 7 月 5 日

(焼砂降)

六月六日より七日迄折々細成る焼砂降る。(日本気象史料)

天明三年 西暦 1783 年 7 月 16 日

(大風雨、洪水)

六月關東一帶に洪水あり。氣寒くして冬の如く禾穀實らず。

(千葉縣誌)

下総國香取郡、匝瑳郡、海上郡、六月十四日夜中より同月十八日の夜迄大風雨にて耕地一丈餘之洪水にて稻草腐爛方は立枯れに相成候。

(一話一言)

天明三年 西暦 1783 年 8 月 3 日

(降灰)

七月六日淺間山大爆發し各地に降灰を見る又是歳より翌年に亘り關東諸國大にう饑う。

七月六日淺間山大爆發降灰四・五寸より六・六寸に及ぶ。(海上郡誌)

七月七日晝より九日夕時に至るまで各地沙土を降らし田圃を害す。

(香取郡誌)

大日本地震史料に見る爆發の跡

七月六日乙未、信濃國淺間山去月二十六日より盛に火を噴き本月一日、火石を傍近に雨らし、是日未刻より三日に渉り鳴動益々強く砂石を飛すこと雨の如し。信濃、上野、武藏、伊豆、下總、陸奥等諸國皆降灰の害を被れり。八日に至り更に泥岩火石を北麓に崩潰し、吾妻川を塞ぎ續て決潰して利根川に

奔注せり沿岸の諸里落之が爲に蕩盡せられ、人畜の死傷せるもの頗る夥し。

私領分下總國海上郡銚子當月六日明ケ六ツ時頃より細か成焼砂降申候處、晝四ツ時頃相止、同七日又々焼砂降續時鳴響有之、闇夜のごとくにて彌降強同八日晝四ツ時頃凡二三寸程降積、村々田畑一面に砂冠に相成申候段彼地に差置候家來之者より申越候尤損毛之儀は未相知不申候、先此段御届申上候以上。

七月十四日

松平右京亮

……………（前略）……………下總國匝瑳郡、香取郡、海上郡七月六日より七日夕迄折々細成る焼砂降候處同八日夜中より強く九日に至り、依所に凡三四寸位積候……………（後略）……………

七月

板倉伊勢守

天明四年

西曆1784年

（凶作）

關東飢饉。

（米相場考）

天明五年

西曆1785年

（旱魃）

夏大旱し禾穀登らず。

（香取郡誌）

天明六年

西曆1786年8月⁴日₁₀日

（大雨、洪水）

七月十一日より十七日に至る大雨のため作物の被害少からず。

（香取郡誌）

七月十三日より七月十七日の夜迄晝夜暴雨降續き古今稀成大満水流失潰家等過半出來近在岡方に引越罷居大飢饉支配御代官御廻村爲成急難御救扶食米金御手當有之其後村方の内難澁に迫り退轉に及ぶものあり。以上は佐原町長島宮増家の記録による。

(佐原町誌)

天明六年七月十五日の大洪水により下總印旛沼も新田開墾之御積りにて餘程埋立候得共今度之洪水にて悉くくづれ元之如く沼になれり。

(天明紀聞)

天明六年 西暦 1786 年 10 月 22 日 ~
11 月 20 日

(大雨洪水)

十月中旬武藏、下総、上野、下野等大雨洪水。

(日本災異志)

秋利根川洪水大いに田圃を浸す。沿岸村落耕地悉く被害し十六島の如きは家屋の床上を浸するに至る。干潟地方も亦水害を被むること甚し。

(香取郡誌)

寛政三年 西暦 1791 年 5 月 19 日

(山崩)

四月十七日朝夷郡江見村西山鳴動し山上の寺院境内俄に水を噴出す少頃にして寺陥没し唯間の屋根本堂の棟瓦及び杉木の梢を現すのみ。周遊奇談に曰く安房國江見村に一禪殺あり。古泉院といふ、二十石の御朱印地なり。和尚誦經せし折から一人の小僧報じて曰く後園より急に水涌き出でたり不思議なる事どもなり。時に一人の下男庫裏の椽先に水吹出すと見る中に境内の大杉の根株に水のつきける故一人の客僧と下男は驚き當前へ走り出で大聲に呼ばりける今にも寺院水中に沈没すべし早々和尚退出し玉へと言い乍ら逃げ出す。和尚は御朱印と過去帳とを左右の手に提げて危く門外に出でむとするにはや

本堂の三分は水中に沈み終に和尚は死骸後までも知れず何處へか逃げうせたりとも水死せりとも定かならず。僅か半時間にも足らざる間に其の寺堂悉く水中に陥没せり。近邊の人々行きて見るに門の屋根と本堂の棟瓦とのみ少しく見え大杉の梢も僅かに地上に見えて幹は地中に陥没せり。希有のことかなり人々大いに驚けり云々と。(安房郡誌)

寛政三年西曆 1791 年 9 月 3 日

(大風雨洪水)

八月六日大雨夜に入て大嵐行徳、船橋辺人多く死す。(武江年表補正畧)

下總逆浪漂没村あり。(野史)

寛政三年西曆 1791 年 10 月 1 日

(大風雨)

九月四日大風雨行徳、船橋、塩浜一円に潰れ民家流失す。(武江年表)

寛政十年西曆 1798 年 5 月 16 日～

(洪水)

四月關東洪水あり。(三貨圖彙)

寛政十二年西曆 1800 年

(洪水)

利根川洪水あり天明度洪水重ぐ。(香取郡誌)

大洪水あり天明の災害に重ぐといふ、その惨狀甚じ。(葛飾區史)

寛政年間 西暦1789～1800年

(旱 魃)

七ヶ年打續きて大旱魃あり。

(安房郡誌)

享和二年 西暦1802年7月26日

(洪水)

六月二十七日大雨洪水あり。

(葛飾區史)

文化二年 西暦1805年^{5月29日～}_{8月23日～}

(旱 魃)

五月より七月に至る間旱す。

(香取郡誌)

文化四年 西暦1807年2月22日

(大 風)

清國商船漂着正月十六日銚子黒生浜の暗礁に触れ破損す。

(木口会史)

文化四年 西暦1807年3月25日

(大 風)

江戸及諸國大嵐。

(續日本王代一覽)

文化四年 西暦1807年12月29日

(火 事)

十二月新生村浜町百姓善五郎方より出火四十七軒焼。(木口会史)

文 化 五 年 西曆 1808 年 8 月 15 日

(大 風 雨)

七月二十五日利根川出水本郡被害あり。 (香 取 郡 誌)

七月二十五日大嵐豆州、浦賀、相州、三浦、三崎、七里濱、房州、駿州、遠
州灘、紀州、和歌浦等通船漂没人多死江戸近國洪水田畑損。

(泰 平 年 表)

文 化 五 年 西曆 1808 年 10 月 12 日

(大 風)

八月二十三日夜大風破損の家屋頗る多し。 (香 取 郡 誌)

文 化 六 年 西曆 1809 年 10 月 2 日

(大 風 雨)

八月二十三日夜亥の刻より二十四日迄大風雨伊豆、房總の漁人多く溺死す。

(武 江 年 表)

文 化 六 年 西曆 1809 年 10 月 27 日

(大 風 雨)

九月十九日大風雨。 (香 取 郡 誌)

文 化 九 年 西曆 1812 年 8 月 23 日

(洪 水)

七月九日利根川出水。 (香 取 郡 誌)

七月中大満水に及び御代官鈴木傳一郎殿水出御見分の爲め佐原村迄御越被支
配内水難村々に御救御手當有之漸く危難凌ぐ。

長島宮増家の記録

(佐 原 町 誌)

文化十一年 西暦 1814 年 8 月 24 日

(大 風)

七月十日大風禾を損し才登らず。

(香 取 郡 誌)

文化十一年 西暦 1814 年 11 月 12 日

(火 事)

十月朔日四ツ時荒野村明神町大火あり。

(玄 蕃 日 記)

文化十二年 西暦 1815 年 2 月 28 日

(降 灰)

一月二十日夜中白砂とも灰とも分らぬもの降る。

(玄 蕃 日 記)

文政四年 西暦 1821 年 $\frac{3}{7}$ 月 $\frac{4}{28}$ 日～

(春夏連旱)

二月より六月に至るまで旱す。

(香 取 郡 誌)

文政六年 西暦 1823 年 9 月 21 日

(大 風 雨)

八月十七日上總國大風雨吹て山田の害夥しとぞ……。 (日本氣象史料)

文政七年 西暦 1824 年

(大 旱)

夏旱す。

(香 取 郡 誌)

文政七年 西暦 1824 年 9 月 5 日

(大風雨洪水)

八月十三日下總國関宿邊大風雨洪水。

(日本氣象史料)

文 政 九 年 西曆 1326 年

(旱 魃)

復た旱す。

(香 取 郡 誌)

文 政 十 一 年 西曆 1828 年 6 月 5 日

(降 雹)

四月二十三日申刻より江都雷鳴夜に入て大雨嵐下總大雹降る。

(東 京 市 史 稿)

文 政 十 一 年 西曆 1828 年 8 月 25 日

(豆 穀 降)

七月十五日の夜豆穀の如きものを降らす。

(香 取 郡 誌)

天 保 四 年 西曆 1833 年 9 月 14 日

(大 風 雨)

八月朔日大風雨名木村民家十一戸を倒し、二十五戸を破損す栗野村亦民家五戸顛倒す、其他諸村皆破害あり。死傷するもの多し。(香 取 郡 誌)

天 保 四 年 西曆 1833 年 10 月 8 日

(暴 風 雨)

八月二十五日大暴風雨あり家屋及樹木の破害甚だ多く、暫時は交通絶え季節が農家の大切なる時故稲作の破害甚大にして翌年の種子に窮し米價は倍價を示し住民大に困難せりといふ。

(千 葉 郡 誌)

天 保 四 年 西曆 1834 年 2 月 1 日

(大 雪)

十二月二十三日下總國葛飾郡大雪烈風にて潰家多し。(日 本 災 異 志)

天 保 五 年 西曆 1834 年 9 月 16 日

(大 風)

八月十四日大風。

(香 取 郡 誌)

天 保 六 年 西曆 1835 年 7 月 8 日

(大 雷)

六月十三日大雷阿玉川民家其他に落震す。

(香 取 郡 誌)

天 保 六 年 西曆 1835 年 7 月 20 日

(地 震 風 雨)

六月二十五日より二十八日の至るの間、地しばしば震し、又風雨多し。

(香 取 郡 誌)

天 保 六 年 西曆 1835 年 7 月 ²²/₂₃ 日

(洪 水)

六月二十七日二十八日より晦日に至り東國大雨洪水利根川坂東太郎堤押切武藏、下總邊田畠大に漂流す。

(續日本王代一覽後記)

天 保 七 年 西曆 1836 年 7 月 14 日～

(寒 冷)

六月北風夏候甚だ冷かなり。

(千 葉 縣 誌)

天 保 七 年 西曆 1836 年 ⁸/₉ 月 ²⁸/₁₁ 日

(大 風 雨)

七月十七日及び八月朔日大風雨禾穀を害す利根川洪水あり沿岸村落耕地を浸す水量高九尺餘。

(香 取 郡 誌)

天保九年 西曆1838年2月26日

(雷)

二月三日大雷。

(香取郡誌)

天保九年 西曆1838年7月21日～

(寒冷)

六月寒冷。

(香取郡誌)

天保十年 西曆1839年2月25日

(大雪)

正月十二日大雪。

(香取郡誌)

天保十一年 西曆1840年

(大風)

大颶あり、ナガラミの砂堤津浪に破碎す。

(地名乱書)

天保十一年 西曆1840年9月¹³/₁₄日

(洪水)

八月十八、十九、両日大雨利根川暴漲し堤防を破壊し十六島浸す。

(香取郡誌)

天保十四年 西曆1843年10月³/₄日

(大風雨)

九月十日十一日上總下總大風雨。

(續泰平年表)

天保十四年

西曆 1843 年 10 月 24 日

(大風雨)

閏九月二日上總國大風雨。

(續泰平年表)

弘化元年

西曆 1844 年 5 月 24 日

(大風雨)

四月八日下總國大風雨洪水。

(續泰平年表)

弘化元年

西曆 1844 年 9 月 7 日

(洪水)

八月六日下總國洪水。

(續泰平年表)

弘化二年

西曆 1845 年 8 月 30 日

(出水)

七月二十八日未時より上總國出水黄昏に至つて其増水の高さ二丈に及び養老川の左右民家の小家流れ田畠の荒し事少からず、夜の子刻に及びて水引ぬといへり、養老川は安房の清澄山より濫觴し北西に流れ五井の里にて西海に入る。

(松屋筆記)

弘化三年

西曆 1846 年 7 月 23 日
8 月 21 日

(霖雨洪水)

夏閏五月下旬より六月下旬に至るまで利根川洪水常總兩國の山觚を限り沿岸の村落は毎戸床を浸し作物悉く被害し十六島の如きに至つては水上に点在し堤防の破壊甚しく九月下旬に至り漸く往来するを得たり、河水の量凡そ一丈餘家屋の流失するものあり。

(香取郡誌)

六月大洪水あり、死者續出す、支配代官より飢人へ御手當として米麦を給せらる。
(葛 飾 區 史)

嘉 永 二 年 西曆 1849 年 9 月 6 日

(大 風 雨)

七月二十日夜大風雨民家破損し田圃の損害甚し。
(香 取 郡 誌)

嘉 永 二 年 西曆 1849 年 9 月 14 日

(大 風 雨)

七月二十八日大風雨各地山崩れ耕地を害し民居を損し利根川溢れ人畜多く死す。
(香 取 郡 誌)

嘉 永 五 年 西曆 1852 年 9 月 5 日

(大風雨、洪水)

七月二十二日下總國關宿大雨洪水。
(續 泰 平 年 表)

安 政 元 年 西曆 1854 年 11 月 24 日

(地 震)

十一月五日大地震あり、大津浪は房總半島から九州東岸に及ぶ。

等 級 四

震源地 南海道沖

(理 料 年 表)

十一月五日關東大地震あり房總の地も亦被害少からず。

安房國に海嘯起りて人畜を害す。
(千 葉 縣 誌)

十一月五日(四ツ時)大地震あり、(九ツ時)大津浪襲來名洗^{アカハギ}の西と云う所に
て区内市在工門の漁船遭難し水夫三名溺死す。
(名 洗 町 史)

安 政 二 年 西曆 1855 年 11 月 11 日

(地 震)

十月二日關東大地震あり、房總の地も亦民家倒潰し人畜の死傷少からず。

(君 津 郡 誌)

十月初旬大地震起り振動甚だ激し地裂けて家屋、土藏等倒壊し人畜に危害を及ぼせり、爾後数日間晝夜引續き激動あり人心恟々皆竹林に危難を避けたりといふ。

(千 葉 縣 誌)

等 級 II

震源地 龜有青戸の線

安 政 三 年 西曆 1856 年 9 月 23 日

(大 風 雨)

八月二十五日夜暴風雨香取神宮老杉六十余株折損す、其他各村亦損害す。

(香 取 郡 誌)

安 政 三 年 西曆 1856 年

(洪 水)

關東大水あり。

(海 上 郡 誌)

安 政 四 年 西曆 1857 年 6 月 14 日

(大 風 雨)

正月二十三日下總國銚子邊大風。

(日 本 災 異 志)

五月二十三日大暴風襲來家屋の倒壊せるもの数多く世人之を己年の荒れと稱す。
(千葉縣誌)

安政四年 西曆 1857 年 7 月 21 日
(洪水)

六月及び五年利根川出水。
(香取郡誌)

安政五年 西曆 1858 年
(大風)

大颶あり。
(吉田東伍)

安政六年 西曆 1859 年 8 月 23 日
(大風雨)

七月二十五日大風雨あり各堤防破壊し當地方一帯泥濘す人畜の被害多し。
(葛飾區史)

安政六年 西曆 1859 年 9 月 8 日
(大風雨)

八月十二日に至り又大風雨あり。
(葛飾區史)

島屋火事

(南風下の火事)

安政年間の事なるも年不詳三月二十五日木更津村南町染物業島屋(姓名不詳)方より發火し忽ち四隣に延焼し折しき吹き荒ぶ南風は火勢を助け黒煙天に漲り其景況物凄く村民死力を盡して消防に従事したるも當時は消防器具の完備せざりしたため遂に八幡町、寺町、山手通を焼き拂い罹災戸數約三百を算し村の過半を失ふ大火事である。
(木更津警察誌)

(香 取 郡 誌)

(香 取 郡 誌)

(鉋子市榎本武陽碑)

(夷 遇 郡 誌)

(香 取 郡 誌)

(葛 飾 區 史)

明治三年 西暦 1870 年 10 月 12 日

(大 風 雨)

九月十八日利根川出水あり沿岸を浸し被害少からず。(日本氣象史料)

明治五年 西暦 1872 年 8 月 25 日

(暴 風 雨)

七月二十二日午後四時頃より南東風強く、猛雨相加り次第に烈しく七時過ぎ南風に轉じ、九時頃より風雨共漸々輕軟翌曉に至る。暴風雨にて村々人畜の死傷作物の損害家屋の破壊山村の倒木及び海岸村々押汐にて堤防の損所等あり……………。

木更津權令より大藏大輔への申牒。

(木更津郷土誌)

明治六年 西暦 1873 年 4 月 30 日

(暴 風 雨)

明治天皇千葉縣下總國習志野に於て近衛兵の演習を御統監のをり四月三十日夜中頃から暴風雨になる。

(測 候 瑣 談)

明治六年 西暦 1873 年 3 月～7 月

(降 雨 稀)

上總國武射、山辺、長柄、三郡は三月より七月まで降雨甚稀なり。

(山 武 郡 誌)

明治六年 西暦 1873 年

(大 旱)

夏旱す。

(香 取 郡 誌)

明 治 六 年 西曆 1873 年 9 月 24 日

(出 水)

九月二十四日利根川十三尺出水。 (中利根川の治水史)

明 治 八 年 西曆 1875 年 3 月 3 日

(火 事)

三月三日木更津村七十四番宅居住齊藤三之助外百八十軒焼失。

(木更津郷土誌)

明 治 九 年 西曆 1876 年

(火 事)

秋木更津博徒通稱神徳の市(今松川樓のある所)より發火仲町、田面通に延焼し五十余戸を焼き拂いたり。 (木更津郷土誌)

明 治 九 年 西曆 1876 年 9 月 17 日

(出 水)

九月十七日利根川十三尺出水。 (中利根川の治水史)

明 治 十 三 年 西曆 1880 年 10 月 3 日

(大 風)

十月三日大風あり。 (香 取 郡 誌)

十月三日暴風の爲海嘯を起し家屋の破損流失するもの多し、四名溺死。

(八 幡 町 誌)

明治十四年 西曆1881年1月

(火 事)

一月某日小見川新田町に火を發し百五十六戸に延焼し西風烈しく黒部川を越えて小学校に及ぶ。 (香 取 郡 誌)

明治十五年 西曆1882年10月15日

(大 風)

十月十五日本郡地方大風。 (香 取 郡 誌)

明治十五年 西曆1882年10月29日

(出 水)

十月二十九日利根川十二尺五寸出水。 (中利根川の治水史)

明治十六年 西曆1883年12月18日

(火 事)

十二月十八日午前一時東金止宿より出火し折からの南西の烈風にて新宿まで延焼す焼失戸數三百八十四、棟數二千餘、郡役所、警察署共に灰燼に帰す。

(山 武 郡 誌)

明治十七年 西曆1884年9月18日

(出 水)

九月十八日利根川十五尺出水。 (中利根川の治水史)

明治十八年 西曆1885年7月1日

(大風雨洪水)

六月下旬より降雨連日七月一日大風雨利根川洪水あり三日神崎橋向地先の堤

防破壊し北岸押砂等の村落二千三百五十七町余歩の浸害あり。

千潟地方の出水亦甚しく大いに禾穀を害す。 (香 取 郡 誌)

明 治 十 八 年 西曆 1885 年 8 月 7 日

(洪 水)

八月七日八筋川字元洲地先の堤防破壊し十四ヶ村耕地千七百十六町を浸し防禦五夜晝にして漸く餘勢を殺ぐを得たり。 (香 取 郡 誌)

明 治 十 九 年 西曆 1886 年 6 月

(大 旱)

六月より降雨なく入野、清和、大寺、秋田、萬力、萬歳、諸村被害尤も甚しく龜折の地二千七百五十九町歩に及ぶ。 (香 取 郡 誌)

明 治 二 十 年 西曆 1887 年 3 月 29 日

(火 事)

三月二十九日神崎町火を失し風力殊に甚しく数戸に延焼す。

(香 取 郡 誌)

明 治 二 十 一 年 西曆 1888 年 1 月 16 日

(火 事)

一月十六日小見川村火災あり西風烈しく百二十戸に延焼す。

(香 取 郡 誌)

明 治 二 十 一 年 西曆 1888 年 7 月 24 日

(出 水)

七月二十四日利根川出水十五尺。

(中利根川の治水史)

明治二十一年 西暦 1888 年 10 月 6 日

(出 水)

十月六日利根川十五尺出水。 (中利根川の治水史)

十月六日降水量 100 耗を観測す。

明治二十三年 西暦 1890 年 4 月 12 日

(火 事)

四月十二日午後九時二十分頃櫻井村小泉卯之助方から發火し折からの北風に
あおられ忽ち二十二戸を焼失して鎮火したと思ふ間もなく、今度木更津町仲
片町松久酒店の裏長屋大塚銀藏方から發火し各所に飛火し南片町、下谷町、
弁天町、南町(西側のみ)新田町、貝淵に延焼して漸く鎮火した焼失戸数四
百七十九軒。 (君津小学校沿革誌)

明治二十三年 西暦 1890 年 8 月 ²³日
²⁷日

(出 水)

八月二十三日中利根川十四尺出水。 (中利根川の治水史)

八月中旬より利根川出水し二十七日十六島被害す。 (香 取 郡 誌)

八月中旬より利根川出水。 (佐 原 町 誌)

明治二十五年 西暦 1892 年 8 月 24 日

(出 水)

八月二十四日利根川十三尺出水。 (中利根川の治水史)

明治二十五年

西曆 1892 年 12 月 28 日

(火 事)

十二月二十八日佐原町協橋近傍より出火し北西風の烈しきに会し小野川を越え諸町に延焼す戸数大約七百餘戸本郡未曾有の大火なり。

(香 取 郡 誌)

明治二十六年

西曆 1893 年 4 月 25 日

(降 雹)

四月二十五日銚子に雹降る。目方五分(小豆大) (銚子測候所)

明治二十七年

西曆 1894 年 7 月

(大 旱)

七月旱害あり。

七月八日より二十八日まで降水なし。

月 / 降 水 量

6 16.2 耗

7 5.9 耗

(銚子測候所)

明治二十七年

西曆 1894 年 8 月 12 日

(出 水)

八月十二日中利根川十四尺五寸出水。 (中利根川の治水史)

八月十日降水量 72.6 耗を観測す。

明治二十八年

西曆 1895 年 8 月 9 日

(出 水)

八月九日利根川十七尺出水。 (中利根川の治水史)

明治二十九年

西曆 1896 年 7 月 22 日

(出 水)

七月二十二日利根川利根運河口二十八尺、富勢地先十四尺出水、江戸川關宿地先十六尺から二十六尺、利根運河二十八尺から六十尺出水。

(中利根川の治水史)

明治二十九年

西曆 1896 年 9 月 ¹⁰日
11 日

(霖雨洪水)

九月十日利根運河三十一尺出水。

(中利根川の治水史)

霖雨九月十一日利根川出水し沿岸諸町村を浸し、金江津、十三間戸區の堤防を破壊し人家を流し田圃を害し推して常陸國に及ぼす。(香 取 郡 誌)

秋霖雨利根川出水堤防を破壊し人家を流し田圃を害す。(佐 原 町 誌)

明治三十年

西曆 1897 年 9 月 9 日

(出 水)

九月九日利根川八尺出水。

(中利根川の治水史)

九月八日降水量 54.2 耗を観測す。

明治三十一年

西曆 1897 年 7 月

(大雨洪水)

七月中旬大雨しばしば降り利根川洪水金江津の堤防を破壊し十六島及び常陸地方を浸す。

(香 取 郡 誌)

明治三十一年

西暦 1898 年 9 月

(霖雨洪水)

九月中旬より霖雨利根川出水沿岸諸町村を浸し多少の被害あり米穀登らず。

(香取郡誌)

九月十三、十四日の両日で降水量 62.0 耗を観測す。

明治三十二年

西暦 1899 年 10 月 7 日

(大風)

十月七日大風家屋を破り樹木を折損し被害夥し。

(香取郡誌)

銚子測候所では南南東 36.8 m/s を観測す。

明治三十三年

西暦 1900 年 4 月 22 日

(出水)

四月二十二日利根川十一尺出水。

(中利根川の治水史)

明治三十三年

西暦 1900 年 9 月 29 日

(出水)

九月二十九日利根川八尺出水。

(中利根川の治水史)

明治三十三年

西暦 1900 年 10 月 8 日

(出水)

十月八日利根川十尺五寸出水。

(中利根川の治水史)

十月七日降水量 46.4 耗を観測す。

明治三十四年 西曆 1901 年 8 月 25 日

(出 水)

八月二十五日利根川十一尺出水。 (中利根川の治水史)

明治三十五年 西曆 1902 年 2 月 26 日

(火 事)

二月二十六日夜木更津町仲片町、南片町に延焼し弁天町に飛火して遂に五十餘戸の罹災戸数を出す大火となる。 (木更津郷土誌)

明治三十五年 西曆 1902 年 3 月 1 日

(旋 風)

下總國海上郡三川村字三川家屋破壊二十餘戸飯岡町で樹木家屋の損害あり。 (日本氣象災害年表)

明治三十五年 西曆 1902 年 8 月 10 日

(出 水)

八月十日利根川十四尺出水。 (中利根川の治水史)

明治三十五年 西曆 1902 年 9 月 19 日

(降 雹)

九月十九日印旛、山武、匝瑳、夷隅の諸郡で降雹の爲め田畑の損害甚大。 (日本氣象災害年表)

明治三十五年 西曆 1902 年 9 月 28 日

(台 風)

九月二十八日朝より風雨あり、午前八、九時の間に至り次第に猛威を奮ひ大

樹を折損し家屋を倒壊し四辺の状は刻一刻と惨状を呈し神代、東条等の小学校倒壊するもの数校に及び其他の損害は實に枚挙に遑あらず。

(香 取 郡 誌)

九月二十八日大暴雨あり、農作物家屋牆壁の被害甚多く樹木は到る處に倒れ一時は交通途絶の有様なりしも幸人畜の傷害なし。 (千 葉 縣 誌)

九月二十八日房總の地大風雨あり人畜の死傷夥し。 (海 上 郡 誌)

九月二十八日暴風の爲め巨大なる老松俗に十二六枝に分る故に十二本松と呼ぶ松倒る。 (鶴 枝 村 誌)

	気 圧	風 向	風 速	降水量
	mm		m/s	mm
銚 子	736	南南東	45.0	114
富 崎	717	南南西	42.0	98

明 治 三 十 六 年

西 曆 1903 年 5 月 26 日

(雷 雨)

五月二十六日雷雨により上總國八幡町落雷死傷者あり、同日木更津降雹著しく積量二寸。 (日本氣象災害年表)

明 治 三 十 六 年

西 曆 1903 年 6 月 15 日

(降 雹)

六月十五日降雹により縣下千町歩被害す。 (日本氣象災害年表)

明 治 三 十 六 年

西 曆 1903 年 8 月 19 日

(降 雹 旋 風)

八月十九日降雹旋風により山武郡十三ヶ村被害反別四千五百町、負傷者一、

潰家十一棟、漁船の破壊樹木の倒折の被害大匠瑳郡内にて三村田畑被害五百町歩。
(日本氣象災害年表)

明治三十七年 西曆 1904 年 7 月 13 日

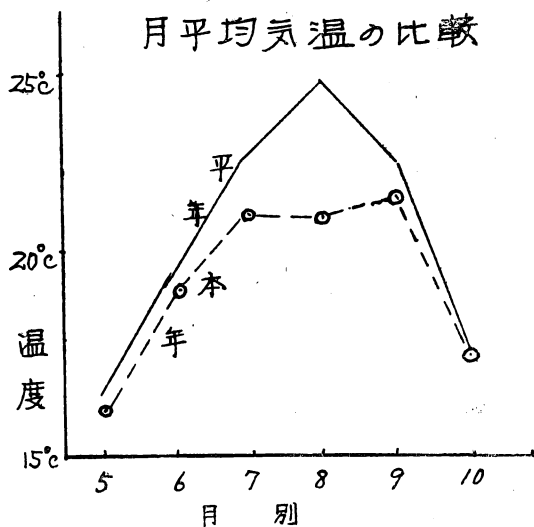
(出 水)

七月十三日利根川十二尺出水。
(中利根川の治水史)

明治三十八年 西曆 1905 年 8 月

(寒 冷)

八月寒冷本縣では平年より四度位い低かつた。
(日本氣象災害年表)



明治三十九年 西曆 1906 年 7 月 17 日

(出 水)

七月十七日利根川関宿十五尺利根運河口三十尺九寸五分、富勢十五尺三寸出

水、江戸川関宿十八尺、野田十三尺六寸、利根川運河口二十九尺二寸一分、
松戸十二尺八寸出水。 (中利根川の治水史)

七月十四日より十六日までに降水量耗 124.6 耗

明治三十年九月 西暦 1906 年 8 月 ²⁴/₂₅ 日

(台 風)

八月二十四日、二十五日両日台風により鉄道線路橋梁、家屋の破損、船舶の
難破多く洪水山崩家屋の浸水多数。

台風本縣東方海上を北東に通過降水量は南西部に多い。

	氣 圧	風 向	風 速	降 水 量
	mm		m/s	mm
銚 子	727	東南東	17.6	千 葉 120
富 崎	737	北 西	34.3	上總港町 140

明 治 四 十 年 西暦 1907 年 3 月 22 日

(大 陸 颶 風)

三月二十二日大陸颶風により關東地方南部に於て道路の破損家屋の倒潰、人
畜の死傷あり漁船又は船舶の遭難多し。 (日本氣象災害年表)

三月二十三日南東 23.9 m/s

明 治 四 十 年 西暦 1907 年 8 月 ²⁵/₂₆/₂₈ 日

(出 水)

八月二十五日利根川関宿地十六尺、富勢地先十三尺五寸出水。

八月二十六日江戸川利根運河口二十九尺六寸五分、松戸十三尺十寸出水。

八月二十八日利根川利根運河口三十二尺二寸出水。 (中利根川の治水史)

八月二十四日より二十八日まで降水量 106.0 耗

明治四十年 西曆 1907 年 9 月 2 日

(霖雨洪水)

九月二日香取郡八筋川地先堤防決潰し十六島田圃悉く被害す然れども早稲は概ね蒔取りたるを以て多少の損害を免るを獲たり。(香取郡誌)

關東及び各地八月下旬よりの雨により利根川氾濫す。(海上郡誌)

佐原町誌にも前文と同意の文あり。

八月二十日より九月二日まで降雨のため千葉縣全般に百耗を越え多い地方は野田附近と中央山岳部で二百耗を越した。銚子で二十一日より二十八日まで降水量 112.4 耗。

明治四十一年 西曆 1908 年 3 月 ⁷日₈

(低気圧)

三月七日八日の兩日台風により漁船船舶の遭難多し。(日本氣象災害年表)
低氣圧房総南岸に接近し北東に去り、銚子では南南東 22.5m/s、富崎で南東 24.6m/s

明治四十一年 西曆 1908 年 6 月 8 日

(降電)

六月八日關東各地に降雹あり、千葉縣下九百五十町に被害あり。

(日本氣象災害年表)

明治四十一年 西曆 1908 年 8 月 ⁷日₈

(台風)

八月七日、八日の兩日台風通過により、房州沖にて汽船沈没。

(日本氣象災害年表)

台風四國、中國を横断日本海に入る 銚子にて氣圧744 耗南南東 20.9 m/s を
観測す。

明治四十二年 西曆 1909 年 3 月 13 日

(地震)

三月十三日房總半島に強震二回あり東京湾沿岸多少の被害あり。

(日本氣象災害年表)

等級 0 震源地 房 總 沖

(理化年表)

明治四十二年 西曆 1909 年 8 月 20 日

(落雷)

八月二十日布佐町に落雷による感電死あり。

(日本氣象災害年表)

明治四十三年 西曆 1910 年 3 月 12 日

(寒冷前線)

三月十二日銚子沖に於て沿海漁船遭難の慘事あり、當時恰も鮪の漁期にして
人々夜を侵して出漁し犬吠岬沖合二十海里内外の洋上に作業中午前十一時天
候俄に變じ颶風雪を巻きて襲來し漁船は激浪の翻弄する所となり檣折れ揖挫
け渺茫無涯の洋上に漂流するもの漁船八十三隻、漁夫一千五十五人の多きに
及べり。

(海上郡誌)

寒冷前線常總地方及び附近海上を通過す、あられ直径7 耗大きさ大豆大積雪
7 糎最大風速 17.8m/s 北西を観測す。

明治四十三年 西曆 1910 年 8 月 9 日

(出 水)

八月九日関宿利根川九尺、江戸川十尺四寸出水。 (中利根川の治水史)

八月九日降水量 65.2 耗

明治四十三年 西曆 1910 年 8 月 ¹²/₁₅ 日

(合 風)

八月中旬連日の南東風は遂に一大暴風雨となり雨量二百五十耗に及び利根川は未曾有の大洪水となり滑川堤及び十六島等各所の堤防決潰し濁流暴漲し下總常陸の間は遂に一泥海に変し数郡の地悉く水底に没し浸水は屋簷に達するに至れり。 (香 取 郡 誌)

八月十二日関宿利根川十八尺四寸江戸川十八尺七寸出水未曾有の洪水で利根江戸両川が印旛沼方面に於いて堤防の決潰したもの六十六箇所に及び被害は甚大であつた。 (中利根川の治水史)

八 月 十 五 日

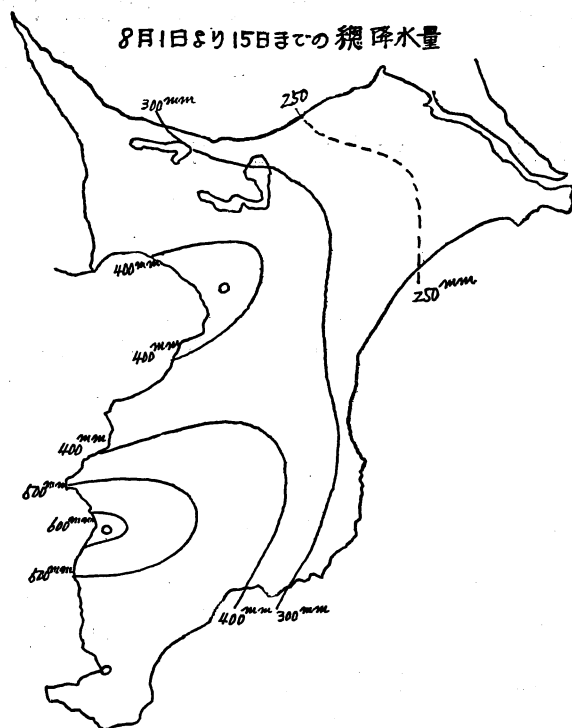
氾濫其極に達し堤防決潰す、本町岩ヶ崎の堤防決潰し瞬時にして濁流滔々本町の南岸を浸す。

八 月 十 六 日

午後五時頃より濁水已に堤上に及び奔流風に激し波浪は堤身を揺り到る處に大龜裂を生じ午後九時半筭島地先決潰す、稻田三千餘町、民家千戸、水底に没す。 (佐 原 町 誌)

八月十五日大洪水あり天明六年以來の水害にして各河水は殆んど氾濫す、堤防の破壊するもの数十ヶ所泥海と化す、死傷者多数、浸水実に十三日間に及ぶ。 (萬 飾 区 誌)

台風本縣大太平洋側を通過連日の降雨總量は千葉市附近と上總港の附近が多かつた。



明治四十四年

西曆 1911 年 6 月 19 日

(台 風)

六月十九日夜中俄に暴風起り波浪高く船舶の難破頗る多し、溺死する者もあり。
(千 葉 縣 誌)

台風近畿北陸を経て奥羽に去つたので本縣は南寄りの風強し。

銚子で気圧 742 耗南南西 22.5m/s

明治四十四年 西曆 1911 年 7 月 25 日

26 日

(台 風)

台風高潮を伴い家屋建物の倒潰人畜の死傷あり海上は船舶の沈没遭難あり、
千葉縣では被害甚大。 (日本氣象災害年表)

台風本縣北西部を通過銚子で気圧 739 耗 風南 31.9m/s

明治四十五年 西曆 1912 年 4 月 11 日

(降 雹)

四月十一日午後六時から五十分までの間にあられ、ひょう降る。形狀大豆大
(銚子測候所)

大正元年 西曆 1912 年 9 月 1 日

(台 風)

九月一日台風により外房州九十九里浜高潮により家屋の倒潰流失破損多く浸
水家屋数百戸。 (日本氣象災害年表)

氣 圧	風 向	風 速	降水量
736mm	東	15.6m/s	106mm

大正二年 西曆 1913 年 5 月 10 日

(降 雹)

五月十日午後一時二十六分小豆大のひょう降る。 (銚子測候所)

大正二年 西曆 1913 年 8 月 27 日

(台 風)

八月二十七日千葉縣暴風雨あり。 (千葉縣誌)

台風本縣南海上を通過二十四日より二十八日までの降水量は縣南で二百耗、中部以北で百五十耗以上に達した。

気 圧	風 向	風 速	降水量
716mm	南東	24.2m/s	158mm

大 正 三 年 西曆 1914 年 8 月 ¹³日
(出 水) 15 日

八月十三日より十五日まで木間ヶ瀬、二川、川間、布佐の四ヶ町村が被害を蒙つた。
(中利根川の治水史)

大 正 三 年 西曆 1914 年 8 月 ²⁸日
(台 風 出 水) 31 日

八月二十九日暴風あり。
(日本氣象災害年表)

八月三十日より九月一日にかけて東葛飾郡に出水あり、被害甚大、堤防決潰木間ヶ瀬村一ヶ所十九間、川間村一ヶ所五十三間、田中村一ヶ所十六間、富勢村二ヶ所五十五間、堤防龜裂木間ヶ瀬一ヶ所十五間、川間村四ヶ所九十間、福田村五ヶ所三十間、我孫子町二ヶ所三十五間、浸水水田、木ヶ瀬村三百二十八町、二川村二百十八町、川間村五百七十六町、田中村三百九十五町、富勢村三百七十八町、我孫子町二百八十一町、湖北村百四十二町、布佐町二十九町、浸水畑十八ヶ村三千四百七町。

家屋浸水四百七十八戸(床上)

百十三戸(床下)

(中利根川の治水史)

台風本縣東方海上通過降水量は三島に於て 227 耗、安房東部以外の地方では 100 耗前後であつた。銚子で気圧 753 耗最大風速南東 18.3m/s降水量 25.7耗

大 正 四 年 西曆 1915 年 2 月 4 日

(低 気 圧)

二月四日強風あり、最大風速北々西 31.1 米。

(銚子測候所)

大 正 五 年 西曆 1916 年 1 月 5 日

(季 節 風)

一月五日暴風あり。

(海 上 郡 誌)

最大風速北 17.7 米

(銚子測候所)

大 正 五 年 西曆 1916 年 3 月 18 日

(降 雹)

三月十八日大豆大の雹降る。

(銚子測候所)

大 正 五 年 西曆 1916 年 5 月 ⁷/₈ 日

(大 陸 颶 風)

五月七日八日大陸颶風により千葉縣下では家屋の倒潰、鉄道の破損、堤防の決潰、橋梁の流失あり其の他の船舶の遭難多し。 (日本氣象災害年表)

大陸颶風により銚子で気圧 742 耗 最大風速南 31.7m/s 降水量 224 耗、富崎で最大風速南西 52.3m/s

大 正 五 年 西曆 1916 年 ⁵/₆ 月

(大 旱)

五六月の間大旱し、水田亀裂し挿秧に従事する能はず、各地に亘り慘狀を極む。

(香 取 郡 誌)

旱害房總地方に於て甚しかつた。

(日本氣象災害年表)

降水量印旛沼、成東、勝浦及び房州南部の四地方では平年より百耗以上も少なかった。

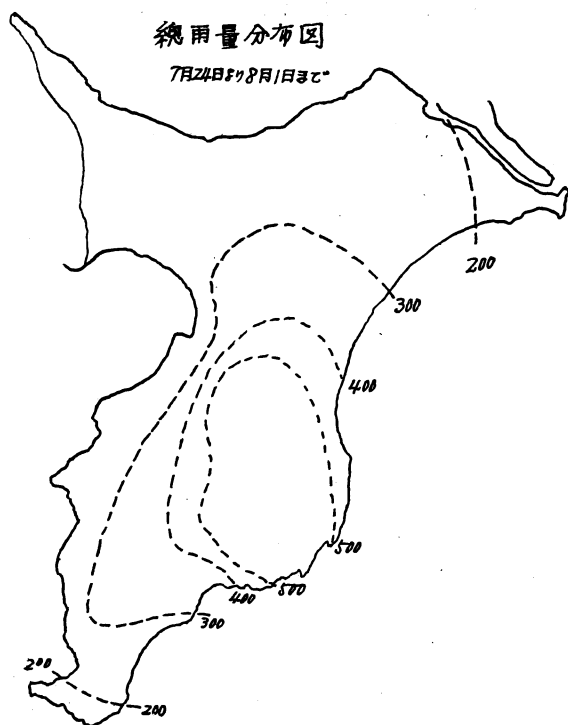
銚子測候所の観測値

種 目	本 年		平 年	
	五 月	六 月	五 月	六 月
降 水 量	185.1	72.9	143.3	151.1
降 水 日 数	14	12	14	15
日 照 時 数	146.7	180.6	192.2	159.2

大 正 五 年 西曆 1916 年 7 月 ²⁹/₃₀ 日
(台 風)

七月二十九日及び三十日の台風により死者二十八、傷者三十七、家屋全潰九十八、家屋半潰百三十五、船舶流失八十、田畑浸水一万八百余町、家屋浸水二千余戸。
(日本氣象災害年表)

台風房総南沖より相模湾に上陸し、日本海に出る、銚子の最大風速は北北東 22.2/ms 夷隅郡に於ては 500 耗に達する雨量あり。



大 正 五 年 西曆 1916 年 $\begin{smallmatrix} 7 \\ 8 \end{smallmatrix}$ 月

(霖 雨 洪 水)

七月下旬より八月に亘り霖雨利根川沿岸及び干潟諸村の水田浸水し損害頗る大なり。

(香 取 郡 誌)

山武郡南部と長生郡夷隅郡に於ては平年より、400 耗 以上も多く其他の地方でも 200 耗 前後多かつた。

銚子測候所の観測値

種 目	本 年		平 年	
	七 月	八 月	七 月	八 月
降 水 量	248.7	306.9	113.7	119.2
降 水 日 数	17	22	12	11
日 照 時 数	140.4	167.4	193.7	239.1

大 正 六 年 西暦 1917 年 ⁶月 ₇月
(大 旱)

六、七月間大旱し、其の程度は更に前年を超え水田は龜裂し、田畑作物の損害甚大にして各地の井戸水涸渇するもの多し。 (香 取 郡 誌)

六、七月の降水量合計を平年値と比較すると東葛飾郡、印旛郡、香取郡、海上郡、匝瑳郡、山武郡、千葉郡の一部及び長生郡、夷隅郡の大平洋岸では百耗以上も少かつた。

銚子候測所の観測値

種 目	本 年		平 年	
	六 月	七 月	六 月	七 月
降 水 量	127.3	8.1	151.1	113.7
降 水 日 数	13	15	15	12
日 照 時 数	131.3	215.4	159.2	193.7

大 正 六 年 9 月 30 日
 西曆 1917 年 10 月 1 日
 2 日

(台風高潮出水)

九月三十日夜半風雨大に起り翌十月一日午前一時より五時に至り猛烈を極め殊に風向の南東より南西に轉する際に風速最も強く家屋の倒壊破損樹木の倒損は論なく死傷者を出すに至れり。

死者十九人、傷者三十六人、住宅全半壊一千四百八十六棟、船舶流失七十隻被害水田一万一千五百四十七町歩餘、桑園九百二十三町歩、畑二千一百十五町。

(香 取 郡 誌)

九月三十日夜半大暴風雨襲來し農作物の大被害あり特に海岸地方一帯は丈餘の大海嘯に襲はれ翌十月一日未明沿岸民屋は殆んど倒壊流失す海岸國道は洗い去られて砂原と化す、

(千 葉 縣 誌)

九月關東一帯に大風雨あり香取神社境内の巨松外その他各地の大木倒るゝもの多し。

(海 上 郡 誌)

関宿町台町地先の最高水位十五尺七寸一分、旭村目吹地先の最高水位十九尺五寸二分、田中村大室地先の最高水位十五尺、富勢村布施地先の最高水位十七尺二寸五分。

(中利根川の治水史)

台風名古屋附近より上陸し長野県中央部を通過し三陸沖に出る、銚子で南南東 35.6m/s 観測す。

大 正 七 年 7 月
 西曆 1918 年 8 月

(大 旱)

七、八月大旱往年に倍し田圃の被害少なからず井戸水涸渴するもの多し。

(香 取 郡 誌)

大 正 7 年

種 目	本 年		平 年	
	七 月	八 月	七 月	八 月
隆 水 量	58.0	33.0	113.7	119.2
降 水 日 數	8	8	12	11
日 照 時 數	244.5	267.1	193.7	239.1

大 正 七 年 西曆 1918 年 9 月 24 日

(台 風)

九月二十四日台風により南東強風あり禾穀を害す。 (香 取 郡 誌)

台風伊勢湾に上陸し富山湾に出たため本県は南よりの風強く銚子では南南東25.6m/sであつた。

大正八年 西曆1919年2月⁸₉日

(降雪)

二月八日九日雪大に降る積量二尺から三尺に達す。　（香　取　郡　誌）

銚子測候所にて7.2 糎を測る。

大 正 八 年 西曆 1919 年 3 月 14 日

(降 灰)

三月十四日午前七時四十分降灰あり、同八時五分止む午前九時二十三分より極めて微細なる降灰あり、同九時五十分止む。

午前五時四十分淺間山爆發す。(銚子測候所)

(出水)

(中利根川の治水史)

(降 灰)

(銚子測候所)

(盲 風)

(日本氣象災害年表)

大正十一年 西曆 1922 年 1 月 20 日

(利根川氷結)

20 日 21 日 22 日

最低氣溫 -2.1°C -2.5°C -3.7

最大風速	9.8	14.5	11.5
------	-----	------	------

(銚子測候所)

大 正 十 一 年

西曆 1922 年 2 月 12 日

(大 陸 颶 風)

二月十二日大陸颶風により千葉縣犬吠岬沖にて發動機船三隻顛覆行方不明二十五人。
(日本氣象災害年表)

大陸颶風大陸より本縣東方海上に出る為に銚子では氣圧 752 耗最大風速南 24.2m/s を測る。

大 正 十 一 年

西曆 1922 年 2 月 ¹⁶日
17 日

(低 氣 圧)

二月十六日より十七日にわたる低氣圧により死者、重傷者多数山崩道路堤防の決潰家屋の倒潰浸水多し。
(日本氣象災害年表)

低氣圧本縣南沖を北東に通過す二月十六日十七日の雨量は君津郡三島に於て二百十三耗に達した銚子で氣圧 744 耗最大風速 38.7m/s 降水量 93.0 耗。

大 正 十 一 年

西曆 1922 年 3 月 12 日

(降 灰)

三月十二日午後十時より二時間降灰あり。
(銚子測候所)

大 正 十 一 年

西曆 1922 年 3 月 15 日

(低 氣 圧)

低氣圧により三月十五日發動機船遭難一隻溺死六名。(日本氣象災害年表)

低氣圧本縣東方海上を北東に進み、ために銚子にて北西 23.9m/s を観測す。

大正十一年 西曆 1922 年 4 月 18 日

(降 雹)

千葉縣印旛郡宗像村積雹五寸

(日本氣象災害年表)

大正十一年 西曆 1922 年 5 月 31 日

(大陸颶風)

五月三十一日大陸颶風により銚子港にて發動機船數隻大破乗員數十名負傷す。

(日本氣象災害年表)

発達した大陸颶風日本海北部を通り、南よりの風強まり銚子では 31 日 11 時に南 14.6 米であったが、次第に弱まり紀伊半島南に発生せる低氣圧が東進して来て 20 時には突然北北東の風 19.5 米となり 1 日 1 時には 25.0 米となった。

大正十一年 西曆 1922 年 10⁴₉ 日

(台 風)

十月八日台風により千葉縣沿岸漁船遭難多數。

(日本氣象災害年表)

台風本縣南約百軒沖を北東にかすめ降水量は北部に多く小御門では二百九十六耗に達し銚子で氣圧 738 最大風速北の 47.3m/s 降水量 156 耗を觀測す。

大正十二年 西曆 1923 年 1 月 3 日

(利根川結氷)

一月三日利根川岸(銚子沿岸)は岸より一間位凍る新川(檢潮所)附近は二十間位凍る又清水地方下水凍る。

(銚子測候所)

大正十二年 西曆 1923 年 4 月 12 日

(大陸颶風)

四月十二日大陸颶風により安房郡館山灣で大栄丸二千二百八十トン坐礁銚子
沖にて帆船一隻行方不明。
(日本氣象災害年表)

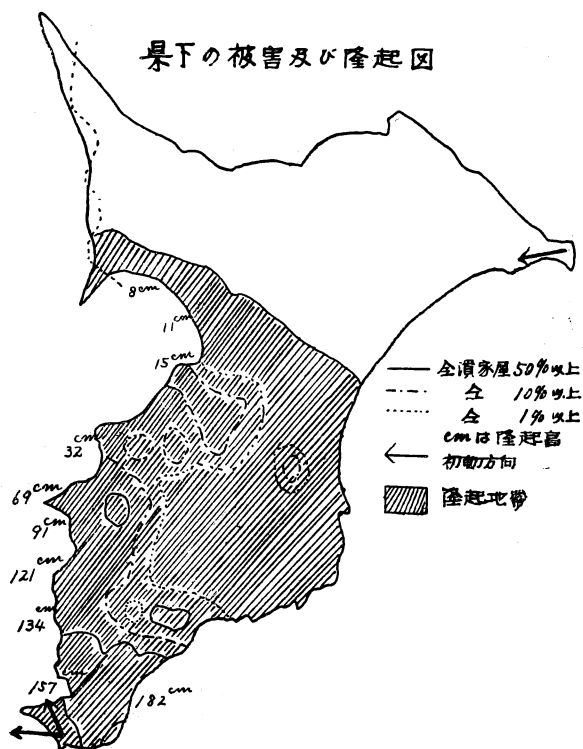
大陸颶風日本海より三陸沖に出る、この不連續線通過し銚子に於ては17時西
南西 12.2 米であつたのが18時には北北東 16.4 米と急変す。

大 正 十 二 年

西曆 1923 年 9 月 1 日

(地 震)

九月一日午前十一時五十八分突如大地震起り未曾有の大惨狀を現出し引續き
余震数度となく襲い來り被害は關東地方全域に及び縣下も大被害を出した。



千葉縣は此の地震の東方境界に近く北部では被害は至つて輕微であつたが南端安房郡の被害は震域中最も被害の著しかった一區域である。

等 級 四

震源地 相模灣

(震災予防調査會報告)

大 正 十 二 年 西曆 1923 年 10 月 11 日

(台 風 眼)

十月十一日台風の中心接近により午前二時五十五分より同三時五分に至る約十分間風力俄かに減衰して無風状態になる此間中心雲散して星輝く但し波浪の音は画鳴的に一入高く聞えた。

(銚子測候所)

台風本縣東岸をかすめ(銚子台風眼の一端通過)銚子で南 34.6m/s を観測す。

大 正 十 二 年 西曆 1923 年 10 月 12 日

(降 雹)

銚子に雹降る重さ最大一匁四分。

(銚子測候所)

大 正 十 三 年 西曆 1924 年 3 月 22 日

(降 雹)

三月二十二日午後十時五分より午後十時三十五分まで蚕大の雹降る。

(銚子測候所)

大 正 十 三 年 西曆 1924 年 5 月 ¹⁹/₂₁ 日

(大陸颶風)

五月十九日より二十一日にわたつた大陸颶風により千葉縣銚子沖にて汽船一隻沈没乗組員数十名死亡。

(日本氣象災害年表)

大正十四年 西曆 1925 年 2 月 20 日

二月二十日午前六時観測の際雨水の甚しく濁り附近硝子戸、地中寒暖計くもり昨夜七時観測の際雨水の濁りよりすれば降灰ありたる如し。

大正十四年 西曆1925年3月⁹日₁₁

三月九日より十一日の間に黄砂降る。(銚子測候所)

(大陸颶風)

(日本氣象災害年表)

大正十四年 西曆1925年4月30日

四月三十日富崎にて落雷により一名死亡し、一棟焼失す。

大正十四年 西曆1925年5月5日

— 83 —

午後太陽面光輝強く深紅色又は銅色を呈す夜に入り月色も亦然り。

(銚子測候所)

大正十五年 西暦 1926 年 2 月 21 日

(空氣震動)

二月二十一日午前十一時四分砲声の如き鳴響二回同十九分一回あり。

(銚子測候所)

大正十五年 西暦 1926 年 4 月 2 日

(大陸颶風)

四月二日大陸颶風により銚子沖にて船舶一隻船体粉碎八名行方不明。

(日本氣象災害年表)

大陸颶風東支那海より四国沖を通り千葉縣南方海上に出る、銚子にて北北東
19.0m/s を観測す。

大正十五年 西暦 1926 年 9 月 12 日

(異常夕焼)

九月十二日日没時に雲全体に夕焼殊に西方地平線近くは深紅色を呈して美麗
状觀を極む。

(銚子測候所)

昭和二年 西暦 1927 年 3 月 10 日

(大陸颶風)

三月十日大陸颶風により發動機船一隻沈没十五名溺死汽船一、漁船三、行方
不明生死不明五十名。

(日本氣象災害年表)

大陸颶風東支那海北部より三陸沖に出る銚子にて西北西 14.0m/s を観測す。

昭和二年 西暦 1927 年 3 月 20 日

三月二十日房總沖にて汽船 (2.217t) 坐礁船体大破、漁船一隻沈没、十一名
行方不明。 (日本氣象災害年表)

大陸颶風東支那海より千葉縣南方沖にでる銚子にて北東 22.9m/s 富崎にて
北 20.1m/s を観測す。

昭和二年 西暦 1927 年 12 月 10 日

(降 電)

十二月十日降電あり、電は経約一、二纏位の球形にして、恰も小梅の如し重
量二瓦餘地上に積ること約八纏位なり、雷は強くないが電光頗る強い。

(銚子測候所)

昭和三年 西暦 1928 年 3 月 10 日

(大陸颶風)

三月十日大陸颶風にて銚子沖で汽船五隻 (5.226t, 1.225t, 4.127t, 2.428t,
1.180t,) 遭難す。 (日本氣象災害年表)

大陸颶風九州沖より千葉縣南を通る銚子にて北北東 24.0m/s を観測す。

昭和三年 西暦 1928 年 10 月 ⁸/₉ 日

(台 風)

十月八日、九日台風により暴風雨となる。

台風は南方海上より北上し本縣東方をかすめ七日より九日に亘る。雨量は
100 耗を越し縣南にて特に多く、安房郡和田に於ては 234 耗に達し、銚子で
は氣圧 730 耗、最大風速南の風 25.6 米、降水量 12.5 耗を観測す。

昭和四年 西暦 1929 年 9 月 10 日

(台風)

沖縄東方より北東進して来た台風は御前崎に上陸し十日房総北部を横断し、
ために本縣は暴風雨となる。雨量は中部以南にて 150 耗内外北西部で 200 耗
を越し野田に於ては 224 耗に達す。

銚子で氣圧 730 耗最大風速北北西 26.3m/s 降水量 135 耗。

昭和五年 西暦 1930 年 11 月 2 日

(低氣圧)

十一月二日、低氣圧により千葉縣に於て發動機船顛覆六名溺死す。

(日本氣象災害年表)

銚子にて最大風速南 16.3m/s

昭和六年 西暦 1931 年 9 月 ²⁵日
28 日

(台風豪雨を伴う)

九月二十五日より二十八日にわたり台風豪雨を伴ひ千葉縣では死傷者十一、
家畜喪失豚三十二、家禽百八十一、家屋全半潰流失百六、同浸水千六百三十
七、船舶流失六、道路埋没流失破損百七、橋梁流失破損五十三、田畑崩壊埋
没八百七十四、農作物被害八百十八町、山岳崩壊二十三、森林被害二十四、
損害見積十六万円。

(日本氣象災害年表)

台風は九州に上陸し中国を経て日本海へ出たので、本縣は雨量多く縣南では
200 耗を越し勝浦に於ては 374 耗に達す。

銚子にて氣圧 750 耗東北東 21.4 米、降水量 114.8 耗を觀測す。

昭和六年 西暦 1931 年 12 月 9 日

(降 灰)

十二月九日午前十時降灰を認む八日浅間山爆發す。(銚子測候所)

昭和六年 西暦 1931 年 12 月 14 日

(降 雹)

十二月十四日午後十一時四十七分から二十分間降雹あり球形にして直径六粒から十粒。(銚子測候所)

昭和七年 西暦 1932 年 2 月 26 日

(低 氣 圧)

二月二十六日午前七時四十分漁船難破す。(銚子測候所)

低氣圧本縣南方沖を北東に進むために銚子で北北東 18.0m/s を観測す。

昭和七年 西暦 1932 年 11 月 ¹⁴/₁₅ 日

(台 風)

十一月十四日、十五日の両日台風により、千葉縣で死者十、傷者九、行方不明二十一、家屋全焼四、全潰八百七十七、半潰千八、浸水床上五百五十八、床下三千四百一、船舶流失二百四十一、破損六百八十九。

(日本氣象災害年表)

台風本縣南方沖を北東に通過し、雨量は縣南では特に多く久留里に於ては二百八十粒に達し銚子で氣圧 714 粒最大風速西北西 31.5m/s 降水量 126.9 粒。

昭和八年 西暦 1933 年 9 月 25 日

(龍 卷)

九月二十五日午前七時二十四分より三十二分頃まで、犬吠岬附近に龍巻あり。
(銚子測候所)

昭和九年 西暦1934年7月～8月

(旱害)

七月から八月にかけて旱害で水稻のみでも一万八千三百八町歩被害す。

(日本氣象災害年表)

平年より百耗以上減少した地方は君津郡南部と夷隅郡北西部であった。

昭和九年

種 目	本 年		平 年	
	七 月	八 月	七 月	八 月
降 水 量	70.1	22.6	113.7	119.2
降 水 日 数	17	6	12	11
日 照 時 数	113.3	187.7	193.7	239.1

昭和九年 西暦1934年9月^{19日}_{21日}

(台風)

九月十九日より二十一日にわたる台風により傷者三、家屋全潰二、浸水十七、学校全潰一、橋梁四十八、道路百六十、堤防十五、田畑其他農作物一万三千六百二十九町。
(日本氣象災害年表)

台風名古屋附近より上陸し新潟縣より三陸沖に出る、本縣南部で雨量多く百耗を越し勝浦に於ては百五十四耗に達す。

	気 圧	風 向	風 速	降水量
銚 子	744mm	南南西	23.8m/s	75.0mm
富 崎	746	南南西	27.5	77.4

昭 和 十 年 西曆 1935 年 2 月 19 日

(火 災)

二月十九日銚子市火事全焼百数十戸。 (日本氣象災害年表)

昭 和 十 年 西曆 1935 年 9 月 ²⁰/₂₅ 日

(台風豪雨を伴う)

九月二十日より二十五日にわたる台風は豪雨を伴ひ千葉縣に於ては死者二、傷者一、家屋全潰十二、半潰二十五、流失四十一、浸水床上六百七十九、床下四千十九、橋梁八十七、堤防破損九、道路四百六十六、田畑浸水流失一千三百七十四、船舶流失沈没三十二。 (日本氣象災害年表)

水位は明治四十三年よりも高く、粟橋で百三十五糎、佐原で百四十七糎高かったため至る所の堤防が溢水する程の危機に陥った。(中利根川の治水史)

台風は南方洋上からゆっくり北上したため18日より降雨あり25日四國へ上陸し日本海へ出たが26日早く別の台風が本縣東方をかすめたため雨量多く久留里に於ては 331 耗に達した。銚子で気圧 737 耗北 14.8 米 降水量 147 耗を観測す。

昭 和 十 年 西曆 1935 年 11 月 7 日

(降 灰)

十一月七日淺間山爆發により、午後二時二十四分より五分間に降灰あり、高神、外川方面にもあり。 (銚 子 測 候 所)

昭和十一年 西暦 1936 年 7 月 29 日

(降 灰)

七月二十九日午後二時四十分灰降り始め空白くなる。(銚子測候所)

昭和十一年 西暦 1936 年 10 月 $\frac{2}{4}$ 日

(台 風)

十月二日より四日にわたる台風により千葉縣で傷者一人、家屋全潰十六、半潰三。
(日本氣象災害年表)

台風名古屋附近より上陸富山県より日本海にでる、銚子で氣圧 724 耗北北西
23.3m/s 降水量 40 耗を觀測す。

昭和十二年 西暦 1937 年 1 月 26 日

(降 雹)

一月二十六日午後七時七分より一時間ばかり降雹あり、大きさ米粒大。
(銚子測候所)

昭和十二年 西暦 1937 年 6 月 7 日

(降 灰)

六月七日午前八時五十分より午前十時まで降灰あり。(銚子測候所)

昭和十三年 西暦 1938 年 $\frac{6}{7}$ 月 $\frac{27}{5}$ 日

(台風と豪雨)

六月二十七日から七月五日までの間、台風と豪雨(梅雨前線によるもの)により、千葉縣に於て死者八、傷者十一、家屋全潰八十六、半潰百四十四、流失十三、浸水床上三千六百六十九、床下一万九百八十、被害反別四万一千七

百七十六町にわたる被害があつた。

(日本氣象災害年表)

台風は六月二十七日より降雨をもたらしながら、ゆっくり北上し、三十日本
県東方をかすめたが、その後梅雨前線により、七月五日迄連日降雨を見て九
十九里より房総南端迄の海岸地方は、三百耗前後であつたが、その他の地方
は四百耗を越し、野田に於ては 590 耗、三島では 581 耗に達した。

最大風速は銚子で北北西 23.5 米であつた。

昭和十三年

西暦 1938 年 9 月 1 日

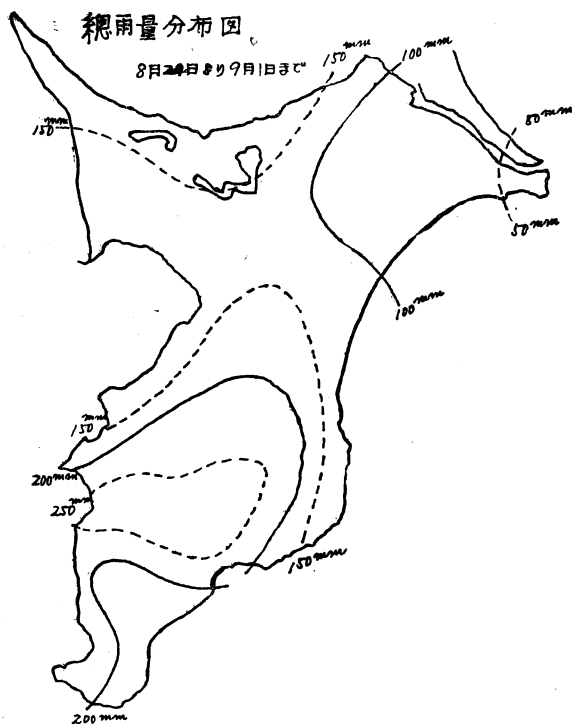
(台風)

九月一日台風により死者十一、傷者二十五、行方不明四、家屋全潰一千六
十、半潰一千五百九十四、流失二、浸水床上二百十三、浸水床下二千百十
二、橋梁流失三十八、堤防決潰十四、道路損潰百七十三、船舶流失沈没十
四、冠水田畑六千二百六十三町の被害あり。(日本氣象災害年表)

九月一日一時神奈川縣三浦半島に上陸し東京の西を通り奥羽に出たため本縣
は暴風雨となり、降水量は北東部以外は 100 耗を越し、縣南では 200 耗を起
し、三島に於ては 297 耗に達した。

銚子、富崎兩測候所観測値

	最低氣圧	最大風速	同風向	總雨量
銚子	749 耗	22.6m/mc	南東	49.1 耗
富崎	725 耗	43.5m/mc	南	200.7 耗



昭和十三年

西暦1938年10月21日

(台風)

十月二十一日台風により千葉県南部に被害あり損害約十五万円。

(日本台風資料)

富崎村家屋全潰三、家屋半潰六、長尾村家屋全潰二、家屋半潰十二、館山市家屋全潰九、家屋半潰二十六、神戸村家屋全潰一、家屋半潰一。

(氣象要覽)

台風十月二十一日本県南方を北東に通過す、ために本縣暴風雨となり内陸部

及び南端では雨量多く館山269 耗大多喜 277 耗に達す。

	気 圧	風 向	風 速	降水量
銚 子	732mm	北	43.3m/s	142mm
富 崎		北	34.4	224

昭 和 十 五 年 西 曆 1940 年 2 月 27 日

(降 灰)

二月二十七日午前六時三十分から同八時三十分まで降灰あり。

(銚 子 測 候 所)

昭 和 十 六 年 西 曆 1941 年 7 月 ¹⁹/₂₃ 日

(台 風)

七月二十二日夜半台風房總半島通過に伴ひ千葉縣に於て死者二、家屋全潰八十二、半潰三十八、浸水床上五百三十八、床下四千二百二十七、橋梁流失九、堤防決潰一、道路決潰五十八、田畑流失二万一千六百九十九町、崖崩二十五の被害あり。

(日本氣象災害年表)

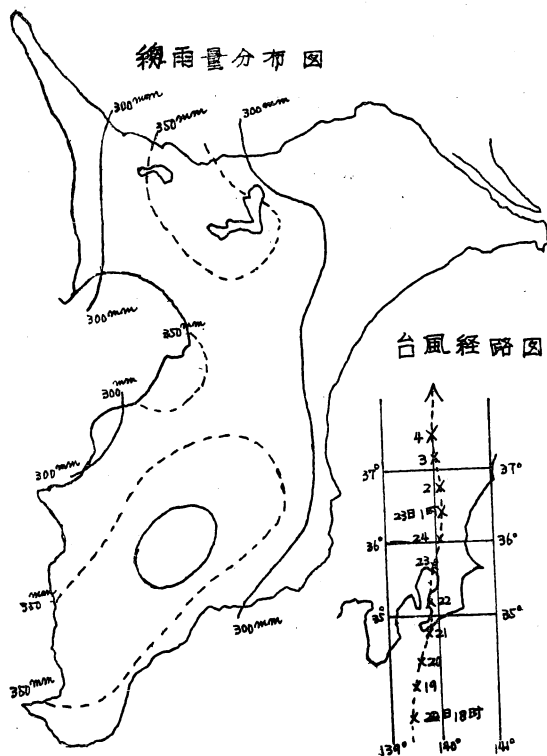
七月二十三日粟橋の最高水位八米二十六、三ッ堀の最高水位七米八十二、船戸の最高水位八米六（七月二十二日利根川運河の水堰が破壊された）。

(中利根川の治水史)

北西に進行して来た台風は本縣南方 300 耗にて進路を北に變じ二十二日夜遅く本縣東京灣沿岸を北上し、茨城、福島を経て三陸沖へぬけた。

全般に雨量多く 300 耗内外で三島に於ては 405 耗に達した。

	最 大 風 速
銚 子	南 24.8 米
富 崎	南西 24.8 米



昭和十六年
(冷害)

西暦1941年7月
8月

七月、八月寒冷にて千葉縣にて水稻減收す。

(日本氣象災害年表)

七月、八月の気温を平年と比較すると七月は全般的に二度低く香取郡は三度低く八月は全般的に一度低く海上郡で二度低かった。

昭和十八年
(降雹)

西暦1943年1月23日

一月二十三日午前七時三十分より十分間降雹あり大きき大豆大。

(銚子測候所)

昭和十八年

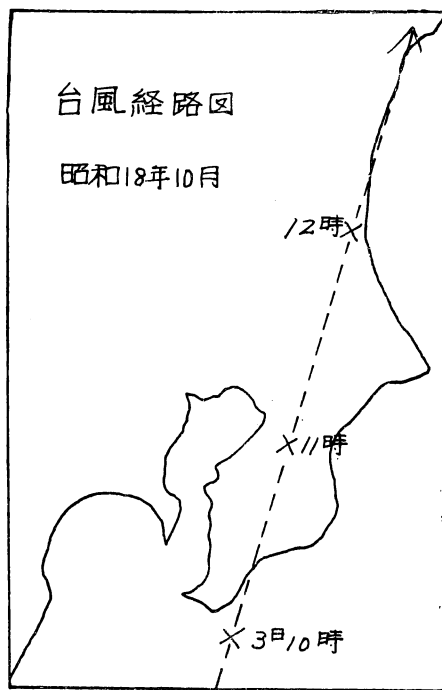
西暦 1943 年 10 月 ³/₄ 日

(台風)

十月三日台風千葉縣を通過し、家屋全潰四十一、半潰二十三、流失三、浸水床下九十一、船舶沈没流失十三の被害あり。 (日本氣象災害年表)

十月三日台風本縣千倉附近より上陸本縣を従断し水戸附近より太平洋に出る銚子及び牛久に於て雨量 150 耗に達したがその他の地方は 100 耗以下であった。

	氣 圧	風 向	風 速	降 水 量
銚 子	729mm	南南西	30.2m/s	153mm



昭和二十年

西暦1945年5月10日

(大火)

五月十日成田町三千五百坪を焼く。

(氣象要覽)

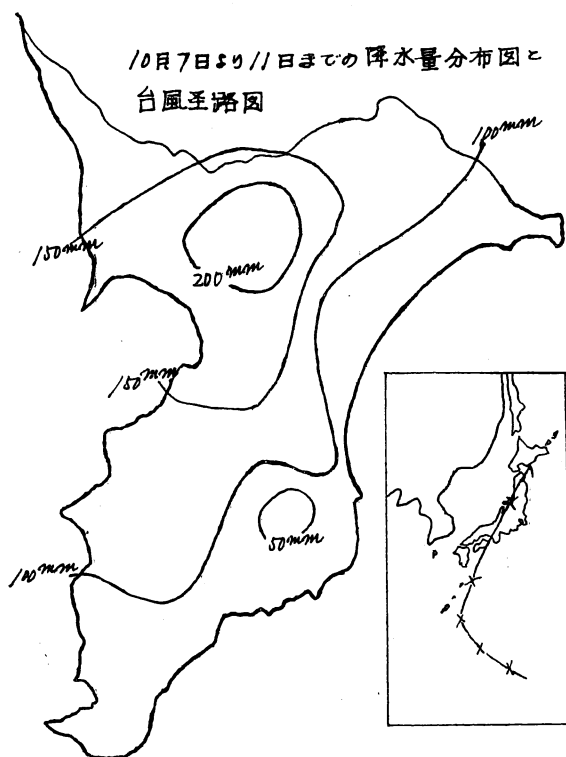
昭和二十年

西暦1945年10月^{7日}_{11日}

(台風)

十月七日より十一日にわたる台風により家屋浸水床下一千三百、田畑浸水七千百六十町の被害あり。

(日本台風資料)



台風紀伊半島に上陸し、富山湾より日本海に出る。本縣北部で 159 耗南部で 100 耗以下で佐倉で 224 耗に達す銚子で南 12.2m/s。

昭和二十二年 西曆 1947 年 7 月 8 月

(旱 害)

七月、八月降水量減少にして旱害あり、千葉縣に於て收穫皆無に換算せる總面積三万二千百三十四段。 (日本氣象災害年表)

本縣全般に七月、八月兩月の雨量は平年より 100 耗以上少なく安房郡、君津郡と市原郡、夷隅郡の大部分では 200 耗以上も少なかった。

昭和二十二年 西曆 1947 年 7 月 13 日 15 日

(台 風)

九月十三日より十五日にわたる台風(カスリン台風)により行方不明三、死者一、家屋浸水九百十七、田冠水八百五十四町、堤防決潰一の被害があった。

(日本氣象災害年表)

台風静岡縣より上陸し三陸沖に出る。本縣北部及び湊附近で 100 耗以上の雨がかった。

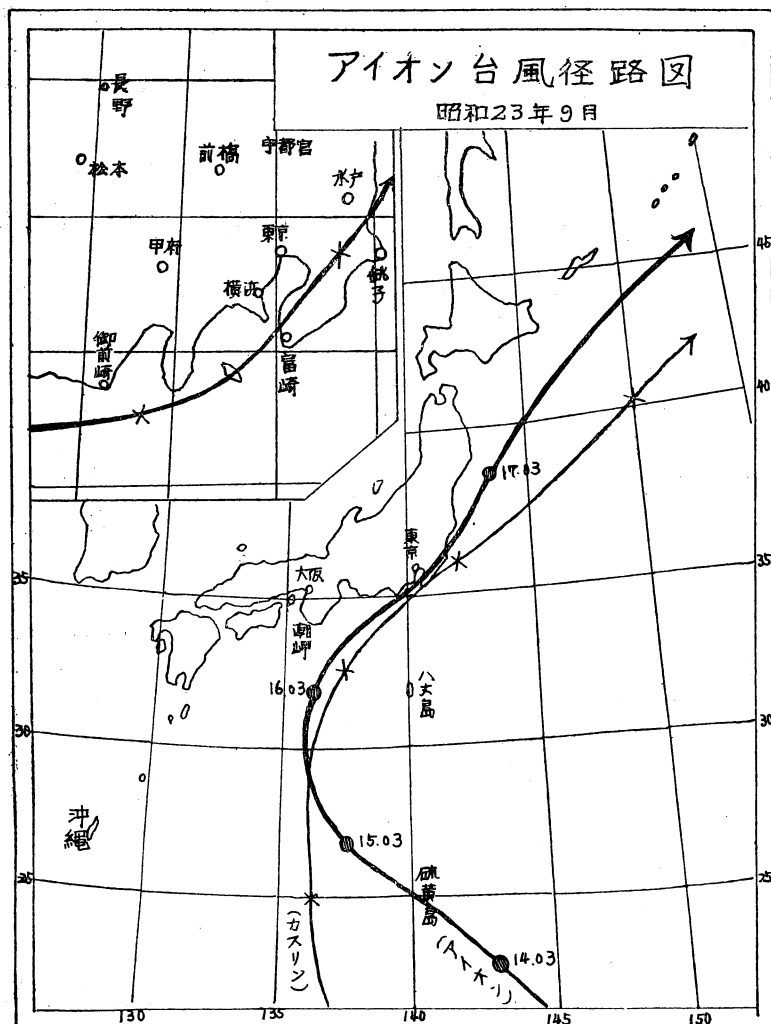
	気 圧	風 向	風 速	降水量
銚 子	743	北北西	19.7m/s	124

昭和二十三年 西曆 1948 年 9 月 15 日 17 日

(台 風)

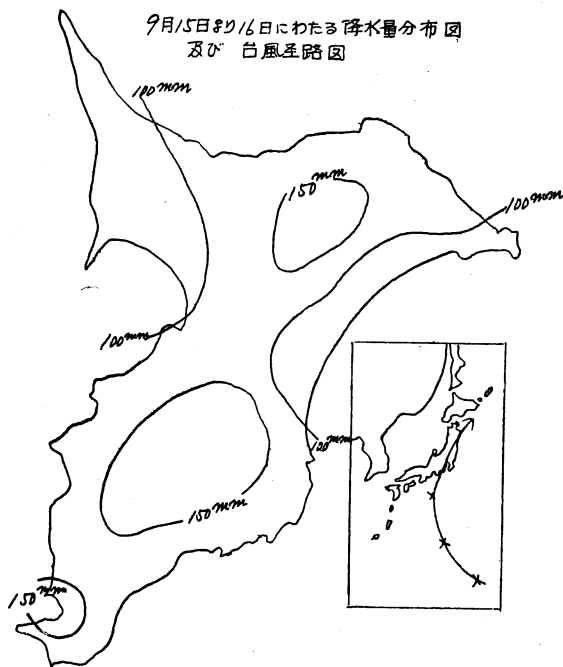
九月十五日より十七日にわたる台風(アイオン台風)に依り千葉縣に於て死者二十二、傷者三百四十五、家屋全潰三千百九十、半潰九千六百二十四、家

屋浸水床上四百二、家屋浸水床下三千四百七、橋梁流失二十九、堤防決潰二百、道路損壞四十六、船舶流失沈没二十八、田畑流失二町、田畑浸水二千八十八の被害あり。
 (気象要覧)



台風本縣を横断し鹿島灘に出る。三里塚にて182 耗大多喜にて178 耗の降雨あり。

	氣 圧	風 向	風 速	降水量
銚 子	723mm	南南東	48.0m/s	85mm
富 崎	720	南南西	46.7	135



昭和二十四年 西暦1949年 8月30日
(台 風) 9月1日

八月三十一日から九月一日にわたる台風（キティ台風）により千葉縣に於て死者八、傷者四、住家全潰六十九、住家半潰四百四十一、住家流失二百六十二、浸水床上三千五百二十、浸水床下六百五十、非住家被害一千百十三、田

冠水一千二百八十三、畑冠水百十五、道路損壞六、橋梁流失七、防堤決潰四十六、山崩一、鐵道被害四、船舶沈沒三、船舶流失二千五百十二の被害あり。(氣 象 要 覽)

台風神奈川縣に上陸、新潟縣より日本海に出る。千葉縣全般に百耗程度の降水量があつた。銚子で氣圧749 耗 東南東 23.6m/s を観測す。

昭和二十四年 西曆 1949 年 10 月 27 日
(台 風) 29 日

十月二十八日千葉縣沖を通過した台風（パトリシア台風）により傷者一、行方不明二、住宅全壊十四、住宅半壊三十六、床上浸水三十七、床下浸水四百五十九、非住家被害五十八、水田流水埋沈六十、水田冠水九百三十一、畑流失埋沈五百三十一、畑冠水四百四十八、道路損潰八、通信施設被害九、船舶沈没十一、船舶破損二十五の被害あり。

（ 気 象 要 覧 ）

台風本縣沖を北東に通過す本縣全般に 150 耗程度の降水あり大多喜で 209 耗の降水あり。

	氣 壓	風 向	風 速	降水量
銚 子	742mm	北東	32.8m/s	198mm

昭和二十五年 西曆 1950 年 1 月 10 日
(低 氣 压)

一月十日低氣圧の通過により死者一、行方不明五、家屋全潰一、船舶沈没一の被害があつた。(気 象 要 覧)

一月十日低氣圧銚子沖を通過す、銚子で北の18.0m/sを観測す。

昭和二十五年

西暦 1950 年 6 月 ⁹/₁₄ 日

(不連続線停滞)

六月九日より十四日にわたる大雨のため死者一、住家床下浸水四十、田冠水五千二百十九、畑冠水九百六十五、道路損壊七、橋梁流失一、堤防決潰二(主なる被害地我孫子周辺)の被害あり。(氣象要覽)

六月九日より十四日にわたる不連続線により本縣全般に 150 耗の降水あり。野田 270 耗吉尾 267 耗の降水あり。

昭和二十五年

西暦 1950 年 7 月 ²⁷/₂₉ 日

(台風)

七月二十七日より二十九日にわたる台風(ヘリーン台風)により家屋床下浸水五百、水田冠水一千九十五、畑冠水七十五、堤防決潰一の被害があつた。

(氣象要覽)

台風本州南方約 300 耗を西進し九州西方に達し本縣は 27 日より 29 日迄降雨あり松戸に於て 177 耗に達す。

昭和二十五年

西暦 1950 年 8 月 3 日

(熱帯性低氣圧)

八月三日二十二時頃勝浦附近に上陸し四日 0 時布佐附近に達した熱帯性低氣圧により住家床上浸水三十五、住家床下浸水三百四十、非住家被害三、田冠水千三十七、畑冠水百十七、道路損潰三、山崖崩れ一の被害あり。

(氣象要覽)

八月三日二十二時頃勝浦附近に上陸した熱帯性低氣圧により香取郡、海上郡に 200 耗の降水があつた。

	氣 压	風 向	風 速	降水量
銚 子	748mm	南	21.4m/s	232mm
勝 浦	744	南南西	17.4	192

昭和二十五年 西曆 1950 年 10 月 29 日

(台風高潮)

十月二十九日より三十一日にわたる台風（ルビー台風）により死者一、傷者三、家屋半壊一、家屋床上浸水五十二、家屋床下浸水四十八、非住家被害三、水田流出埋没二、道路損潰三、橋梁流失五、堤防決潰三、鉄道被害一、船舶沈没一、船舶破損一の被害があつた。特記すべき現象は外房総沿岸一帯に起つた高潮である。これは銚子沖を台風が通過した後約五時間の午後七時半頃突然三回にわたつて押寄せた大波で漁船及び沿岸施設に多大の被害をもたらせた。とくに銚子外川港では被害が大であつた。（気 象 要 覧）

台風本縣沖を北東に通過す 降水は全般的に少なく 100 耗以下で南東部は 100 耗を越し大多喜、勝浦附近で 200 耗であつた。

銚子北東 19.1m/s 降水量 114 耗。

昭和二十六年 西曆 1951 年 1 月 9 日

(地震)

一月九日午前三時三十二分地震あり。本縣の一部に小被害あり。

震源地 養老川中流域

(氣象要覽)

昭和二十六年 西曆 1951 年 2 月 14 日

(低 氣 压)

低氣圧屋久島南方を東北東に進み八丈島附近を通過した。爲に本縣は大暴風

雨雪となり。館山勝浦では100 耗以上の降水量を観測し銚子では風が強く最大風速北北東 34.3m/sec 瞬間最大風速北北東 42.8m/sec に達し、4 時間にわたつて 30m/sec 以上の風が吹き續き 20m/sec 以上の風は12 時間も續いたが雪は降らなかつた。また銚子では約 50 糎の高潮が観測された。

死者 4 人 行方不明 4 人 住宅全壊 37 壊 住宅半 37 非住家被害 144

鉄道被害 20 漁船沈没 22 漁船破損 81

農作物蔬菜 5,000 反 促成育苗 116 反 (気 象 要 覧)

昭和二十六年 西暦 1951 年 7 月 ~ 8 月

(干 害)

七月中旬より八月末にいたる寡雨多照による干害、東葛飾郡、印旛郡、手賀沼周辺に特に甚しい。

被 害

作物名	被害面積	被害率
陸 稲	56,000反	16.2%
大 豆	53,000反	24.5
里 芋	14,000反	43.5

(気 象 要 覧)

昭和二十六年 西暦 1951 年 10 月 15 日

(合 風)

台風は南西諸島の西側を通り鹿児島県西岸に上陸し、浜田附近より日本海に出て中心は分裂した。九州、中國地方に大きな被害があつた。

被 害

建物半壊 1 床上浸水 4 床下浸水 52 非住家被害 1

	最大風速	同風向	降水量	
銚子	20.8m/s	南西	40.1mm	
富崎	26.7	南西	55.5	(氣象要覽)

昭和二十六年 西曆 1951 年 11 月 24 日

(火 事)

十一月二十四日勝浦町の測候所の南約百二十米の旅館から出火折からの二十米近い南風により火勢瞬時に拡大し、死者九、傷者三、家屋全焼七九戸、損害九百万円の大火を引き起した。 (氣象要覽)

昭和二十七年 西曆 1952 年 5 月 1 日

(降 雹)

五月一日匝瑳郡に降雹あり水稻苗代 0・五町桑 0・一町の被害あり。

(氣象要覽)

昭和二十七年 西曆 1952 年 6 月 24 日

(台 風)

六月二十二日石垣島南方にあり二十三日二十時頃紀伊半島に上陸し、二十四日二時五十分頃東京附近を通過し柏布佐の間を通り鹿島灘に出た。

被 害

死者 4 行方不明 39 建物全壊 5 建物半壊 8 床下浸水 80
 非住家被害 2 水田冠水 2.071 町 畑冠水 417 町 道路損壊 46
 橋梁流失 2 堤防決壊 7 山くずれ 12 電柱倒壊 93 鉄道 1
 船舶沈没 4 船舶流失 19 船舶破損 7 (氣象要覽)

	最大風速	同風向	降水量 22日～24日
銚子	25.7m/s	西南西	101.8mm

富 崎 32.5 南南西 96.8

降水量は全般に多く南部で百耗を越し、山岳部では百五十耗を越した。

(気 象 要 覧)

昭和二十八年 西暦 1953 年 7 月 ¹⁶/₂₄ 日

(大 雨)

七月十六日より二十四にわたり梅雨前線の活動により十八日十九日に大雨となりその後二十四日まで雨が續き被害が起きた。

被 害

床 下 浸 水 99 田 冠 水 1.031

畑流失埋没 1 山くずれ 3 (気 象 要 覧)

昭和二十八年 西暦 1953 年 9 月 ²⁵/₂₆ 日

(台 風)

九月二十五日に室戸岬の南方海上から志摩半島に上陸し伊勢湾を横断し愛知縣に上陸長野縣北部にて分裂し福島縣南部で消滅した。

被 害

負傷者 1 行方不明 2 建物全壊 2 建物半壊 3 建物一部破損 31

床上浸水 14 床下浸水 221 非住家被害 10 田冠水 361

畑冠水 38 道路損潰 2 堤防決潰 14 山崖くずれ 11 電柱倒壊 29

板塀倒壊 236 鉄道被害 1 通信施設被害 15 船舶沈没 2

船舶流失 1 船舶破損 1

最大風速 同風向 降水量
銚 子 23.2m/s 南南西 5.5mm

富 崎 27.8 南西 90.6 (気 象 要 覧)

昭和二十九年

西暦 1953 年 1 月 ²³/₂₄ 日

(大 雪)

二十三日に東支那海に低氣圧が発生しこの低氣圧が本州南方海上を發達しながら進むにしたがって雪は益々激しく二十四日朝までにかんりの積雪を見た。

被 害

死 者 1 家屋倒壊 1 電柱倒壊 144 板塀倒壊 2 通信施設被害 215

銚子最大風速風向 22.5m/s 北北西 降水量 51.0 耗 (氣 象 要 覽)

昭和二十九年

西暦 1953 年 6 月 ²⁸/₃₀ 日

(大 雨)

六月二十八日梅雨前線本州南岸に停滯し大雨となる。

被 害

水田冠水 1.132 畑流失埋没 1 道路損壊 2 山崖くずれ 5

(氣 象 要 覽)

昭和二十九年

西暦 1954 年 8 月 ¹⁹/₂₀ 日

(台 風)

八月十八日鹿児島西部に上陸後急速に衰え、十九日琵琶湖附近を通過後分裂し衰えた。

被 害

建物一部破損 1 堤防決潰 2 通信施設被害 1 (氣 象 要 覽)

昭和二十九年

西暦 1945 年 9 月 ¹⁸/₁₉ 日

(台 風)

九月十八日紀伊半島に上陸後太平洋をかすめ本縣中央部に上陸し銚子附近から東方洋上に去った。

被 害

行方不明 1 住家全壊 1 住家半壊 1 住家一部破損 5 床下浸水 229

非住家被害 1 畑冠水 431 畑冠水 69 道路損壊 2 堤防決潰 3

電柱倒壊 2 板塀倒壊 104 通信施設被害 380

最大風速 同風向 降水量

銚 子 21.0m/s 南 東 60.7 耗

富 崎 23.3 西北西 104.1 (氣 象 要 覧)

昭和二十九年

西曆 1954 年 9 月 27 日

(合 風)

九月二十六日大分縣から中國地方を横断し山陰沖から日本海に抜けて北海道に接近しカムチャツカに去る。

被 害

住宅全壊 1 住宅半壊 4 床下浸水 54 非住宅被害 4 電柱倒壊 5

板塀倒壊 9 通信施設被害 3

最大風速 同風向

銚 子 21.0m/s 南南西

富 崎 22.0 南南西 (氣 象 要 覧)

昭和二十九年

西曆 1954 年 11 月 28 日

(低 氣 圧)

十一月二十七日低氣圧が南海道沖を発達しながら東北東に進み潮岬沖を通過し八丈島東方沖上に去る。

住宅全壊1 住宅半壊1 住宅一部破損3 床上浸水97 床下浸水305
非住宅被害28 水田冠水5 道路損壊14 橋梁流失1 堤防決潰1
土壌崩れ12 電柱倒壊20 板塀倒壊244 通信施設被害7
船舶破損3 (氣象要覽)

昭和三十年 西曆1955年5月15日

(降電)

五月十五日午後三時頃本縣中央山岳部附近にかなりの降電があり木更津一ノ
宮を結ぶ地域に被害が多かつた。(銚子測候所)

昭和三十年 西曆1955年8月3日

(強雷雨)

八月三日成田、船橋に強雷雨あり、落雷により死者もあり可成の被害があつた。

死者2(成田船橋各一) 床下浸水400(成田) 住家全壊2(成田)
住家半壊2(成田) 住家全焼3(南総町、多古町、習志野市)
水田埋没1.5町(成田) (銚子測候所)

昭和三十年 西曆1955年10月18日

(龍巻)

十月十八日午後十一時十七分銚子半島南岸名洗町に龍巻が上陸し北東に進
み生町より海下へ去った。

被害

死者1 傷者11 住宅全壊27 住宅半壊34 住宅一部被害20
非住宅被害36 機動船大破7 伝馬船26 (銚子測候所)

千葉縣の氣候

本邦は世界の氣候帶のうち溫帶に属し西に巨大なアジア大陸を、東に茫洋たる太平洋を有する關係上冬季には大陸に蓄積された寒冷な北西季節風卓越し、夏季は北太平洋よりの高温多湿な南東季節風に支配されている。北西季節風は日本海を通ることにより寒冷を幾分緩和すると共に多量の降水を裏日本にもたらすが本縣は表日本氣候に属するので寡雨の冬となり、夏季は北太平洋高氣圧よりの高温多湿な季節風により安定した夏となるが関東北西部の如き雷雨は殆どない。春秋の候台風、低氣圧は房総沖を通ることが多いので雨量は多い。詳細に見ると本縣は海岸線が長いので寒暖の差が少く房総南端より九十九里を経て銚子半島に至る太平洋沿岸地方は暖流の影響で最も温暖で平均氣温は16度内外である。この地方は盛夏の候でも最高平均は29度で夏季を通して最高氣温が30度を越すのは10日位のものである。嚴寒の候でも最低平均は1乃至2度であり最低が氷点下になるのは冬期を通して20日位で房総南端では5日である。東京灣沿岸地方である君津郡より市川市に到る地域では上記に次いで温暖となっているが八月の最高平均は30度一月の最低平均は氷点下1乃至2度である。年平均氣温は15度で東京より稍々高い。

内陸地方と名付くべき君津郡、夷隅郡、市原郡の一部と、印旛郡、東葛飾郡に於ては寒暖の差は最も大きく年平均氣温は14度である。一月の最低平均は氷点下3度であり三里塚に於ては氷点下4度となっている。

盛夏期の最高極は37~38度嚴冬期には最低の極は氷点下10度迄下りその寒暖の差は大きい。

雨量の分布を見ると夷隅郡と君津、市原の内陸部の丘陵地域山間部では年間2000耗を越し県下最多雨地域であり海上郡（含銚子半島）と県南では1600耗で

これにつぎ、縣北では1400耗である。冬は雨量少なく特に一月は50耗で最寡雨である。夷隅に於ても、80耗に過ぎない。春期は雨量も多くなり、夷隅郡、君津、市原の内陸部では一ヶ月180耗となり、県北で110耗となっている。梅雨期である6月、7月は春期と殆んど同量であり、8月には150乃至190耗となっている。9月、10月は最多月となっていて県北で2000耗、県南で2400乃至2800を越す。11月は少なくなり100耗内外となっている。

初夏の候、暖流上を北上する小笠原高氣圧の暖湿氣塊と、北東の寒氣との混合により、太平洋の沿岸地域に濃霧が発生し年間30日に達するが範囲は狭く沿岸地方に限られ、早朝多く午後は少なく、持続時間は2乃至3時間である。

霜は内陸地方に於いて、11月初めより、4月中旬に及び東京湾沿岸に於ては少なくなり、房総南端に於ては、結霜日数は5日に過ぎない。

降雪は寒候期に於て県下全般に6乃至7日に過ぎず、太平洋沿岸地域に於ては、積雪を見る事は殆んどない。

風速は一般に大で太平洋沿岸地域は特に強く、年間平均風速は5米で暴風日数は年130日に達し殊に冬季及び春季には1ヶ月12乃至16日も強風が吹く。東京湾沿岸地方と内陸地方に於ても南西風と北西風は、太平洋岸と同程度に強いが、年平均風速は3米で稍弱くなっている。暴風日数は年間30日位のものである。

平均氣溫 (最高低平均)

地名	月												統計年数	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		全 年
銚子 勝浦 八日市場 成東	1.5	2.0	4.7	9.6	13.3	16.7	20.4	22.4	20.5	15.5	9.9	4.1	11.7	51
	1.7	1.8	4.5	9.7	13.7	17.4	21.0	22.5	20.1	14.6	9.3	4.2	11.7	51
	-1.0	-0.2	2.5	7.8	12.3	16.5	20.4	21.7	18.9	13.1	7.2	1.6	10.1	34
	-0.6	-0.3	2.5	7.5	12.6	16.9	21.0	21.9	18.8	12.9	7.5	1.8	10.2	17
大喜 三島 館山 木更津	-1.0	-0.6	2.2	7.9	12.4	16.6	20.9	21.6	19.0	12.6	6.9	1.3	10.0	41
	-1.5	-1.1	2.0	7.6	11.9	16.4	20.9	21.5	18.4	12.0	6.3	0.8	9.6	33
	0.7	1.2	3.9	9.4	13.6	17.8	21.8	22.6	19.7	13.7	8.4	3.4	11.4	49
	-0.2	0.2	3.0	8.1	12.8	17.0	21.5	22.6	19.5	13.1	7.4	2.1	10.6	43
柏 三里塚 佐原 松戸 茂原	-3.0	-2.0	1.5	7.4	12.4	16.7	20.5	22.1	18.4	11.7	4.7	-0.9	9.1	11
	-4.4	-3.3	-0.2	5.8	10.7	15.0	19.6	20.5	17.4	10.7	4.2	-1.8	7.9	41
	-1.0	-0.4	2.4	7.5	11.9	16.1	20.2	21.8	19.0	12.6	6.5	1.1	9.8	43
	-2.0	-1.4	1.5	7.1	12.0	16.6	20.7	21.7	18.6	12.5	6.0	0.2	9.5	44
	-0.8	-0.4	2.8	8.2	12.6	16.9	21.0	21.2	18.9	12.8	6.9	1.4	10.1	46

降水量

地名	月												統計年数	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		全 年
銚子浦八日市場成多大喜三島山館木更津柏里塚原戸原茂都	76.3	105.4	135.8	139.7	133.4	159.6	115.4	129.9	208.8	254.6	133.4	90.3	1682.6	50
	91.7	119.8	156.3	169.7	174.4	198.8	140.1	155.3	236.2	286.1	150.7	98.7	1977.8	49
	57.1	108.3	110.2	134.1	141.7	161.2	118.8	125.5	203.8	245.7	128.7	80.8	1615.9	34
	49.7	88.8	97.4	132.8	111.2	161.2	134.6	153.4	180.7	230.1	117.4	76.8	1534.1	19
	83.1	107.2	170.6	185.5	184.1	190.3	143.1	172.1	267.6	288.3	133.7	97.2	2022.8	44
	76.3	122.0	164.2	184.6	177.4	200.9	159.6	208.2	279.2	251.0	145.6	92.4	2061.4	43
	70.3	101.2	153.9	164.7	166.6	198.5	154.3	177.6	242.8	255.5	143.4	94.6	1923.4	49
	52.9	73.2	103.4	119.9	118.3	158.8	118.2	162.5	210.5	194.1	96.9	62.9	1471.6	41
	51.3	67.6	108.7	118.1	107.8	181.1	132.3	174.4	172.9	171.9	95.6	56.3	1438.0	9
	49.1	73.6	96.2	111.9	114.1	143.6	108.1	136.9	183.7	191.5	95.6	49.6	1353.9	40
	55.5	81.9	96.9	118.5	117.1	156.1	116.4	133.1	192.8	198.3	92.5	64.1	1423.2	45
	47.6	63.8	89.1	111.1	125.8	156.1	132.7	148.5	210.0	188.3	95.5	57.2	1425.7	44
67.9	90.1	130.6	139.5	146.1	163.3	142.1	138.5	229.7	260.4	122.9	79.1	1710.2	45	
39.6	71.8	87.3	115.8	101.1	150.1	114.7	147.2	181.2	205.0	96.3	64.1	1374.2	25	

あ　と　が　き

この「氣象災害史」は銚子測候所において多年県下の古文書を渉獵し、県下に発生した氣象災害を抽出編集されたものである。

編集終了後この印刷発行について県宛依頼があったが、諸種の事情により、貴重なる資料であることを認めながらも、その実施についてうちよせざるを得なかった。

このような状態で徒に三年の歳月を費し、危くこれが発行は忘れられようとした今春、再び銚子測候所よりの要望があり、こゝにおいて当千葉県氣象災害連絡協議会で出版、実費頒布として発行することを決意し、関係諸機関と折衝を続け、やっと出版予定部数を確約し、千葉県総合職業補導所において印刷に付することが出来た。

この間、千葉銀行、千葉県農業協同組合中央会、千葉県信用農業協同組合連合会、千葉県町村会等の御支援を仰いだことを衷心より感謝する次第である。

時、あたかもオ一五号台風の本県通過が懸念され、県民かたずをのんで待機するうちに無事殆ど被害をもたらさず南方海上にそれ、昨年と引続き豊稔の秋を迎え、このよき年のよき季節に本誌が発行されたということは又意義あるものと思う。

編者共々心からこの出版を祝うものである。

昭和三十一年十月十日

千葉県氣象災害連絡協議会長

友　納　武　人

昭和28年 西丁/953年4月25日

(降霜)

4月24日午後気圧の谷がとありその右通川より南東進してきた、
移動性高気圧に掩われ風も弱まり天晴となり県下全般に晩霜をみ
た。

各地の降霜状況及び最低気温

並	柏	布佐	佐倉	三塚	本納
	-1.7	1.2	1.0	-2.9	1.5
弱	野田	佐原	松チ	小御門	
	0.9	2.5	2.5	0.8	
被害大	千葉	印旛	香取	市原	の各郡
被害中	匝瑳	君津	山武	東葛飾	海上の各郡

昭和28年 西丁/953年5月3日

(降霜)

5月2日 夜気圧の谷がとあつた右通川よりの高気圧が日本海を
至て関東地方に急進に南東進してきたので風も弱まり急激に冷え
込み 県下全般に降霜をみた。

各地の降霜状況及び最低気温

並	成原	布佐	三塚	三島	
	2.2	1.5	0.1		
弱	野田	柏	成東	八市場	佐倉
	0.0	-1.4	3.5	3.5	1.6
被害大	君津	市原	千葉	葛飾	印旛 香取郡
被害中	山武	匝瑳	海上郡		

千葉県氣象災害史

昭和31年10月20日印刷

昭和31年10月30日発行

編集者 銚子測候所

発行者 千葉県氣象災害連絡協議会
(千葉県庁農地農林部農業技術課内)

印刷所 千葉総合職業補導所